

神奈川大学教職課程「特別活動論」テキスト

為すことによって学ぶ



2016(平成28)年度

神奈川大学教職課程

【目次】

	(テキストの手引	……………1～2)	
第1章	特別活動とは		
1	教育課程における「特別活動」	……………	3
2	「為すことによって学ぶ」とは	……………	7
	〔演習①-A〕 自覚を深めるために行ったこと	……………	8
第2章	学級・ホームルーム活動		
1	学級（ホームルーム）とは	……………	9
2	学級（ホームルーム）活動の内容	……………	11
	（【資料②-3】学級活動 年間指導計画 ……………18）		
3	学級経営の課題	……………	19
	〔演習②-A〕 学級指導展開例の作成	……………	21
	〔演習②-B〕 学級びらきの話し	……………	22
第3章	生徒会活動		
1	生徒会活動の意義	……………	23
2	生徒会活動の支援の在り方	……………	24
	〔演習③-A〕 地域からの苦情への解決策	……………	26
	〔演習③-B〕 中学校生活体験活動の企画	……………	27
第4章	学校行事		
1	学習指導要領に示された学校行事	……………	28
2	儀式的行事とは	……………	29
3	旅行・集団宿泊的行事で留意すべきこと	……………	31
	〔演習④-A〕 旅行・宿泊的行事の企画	……………	34
	〔演習④-B〕 文化的行事の振り返り	……………	35
第5章	ボランティア活動		
1	学校におけるボランティア教育	……………	36
2	学習指導要領に示されたボランティア活動	……………	37
3	中学校におけるボランティア活動	……………	38
4	高等学校におけるボランティア活動（体験談）	……………	39
	（【資料⑤-2】中学校「学級活動」指導案（例） …… 40）		
	〔演習⑤-A〕 ボランティア活動の実践に向けて	……………	43
	〔演習⑤-B〕 学級委員会の企画	……………	44
第6章	特別活動において配慮すべきこと		
1	特別活動の特徴	……………	45
2	特別活動と他の領域・指導との関係	……………	46
3	地域との連携，社会教育施設等の活用	……………	47
4	特別活動の評価	……………	47
第7章	「部活動」について考える		
1	部活動の実態と意義	……………	48
2	部活動が抱える問題点と解決への模索	……………	50
	〔演習⑦-A〕 顧問の心構え	……………	53～54
	（あとづけ）		

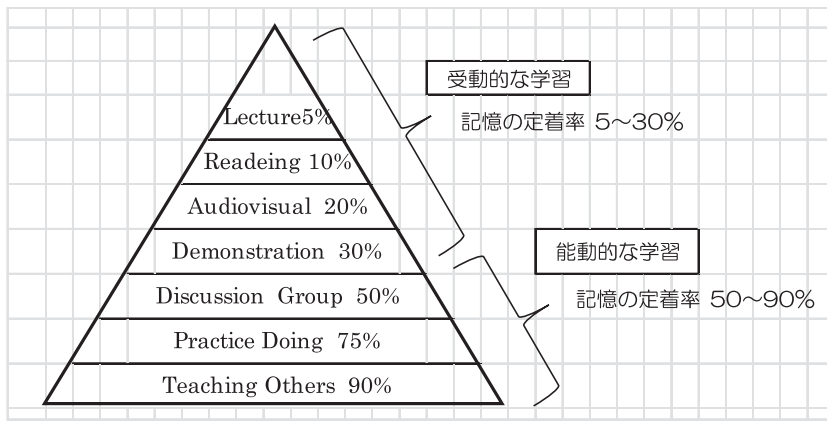
テキストの手引

特別活動論の授業では「グループワーク」を取り入れて行うことを予定しています。
次に、その基本的な考え方と実施の方法を記したので確認しておきましょう。

1 学んだ内容はどの程度記憶に残るのか (記憶の定着率)

下の示したのは、アメリカ国立訓練研究所 (National Training Laboratories) が導き出した「記憶の定着率」を表す「ラーニングピラミッド (Learning Pyramid)」です。

【資料】 Learning Pyramid (National Training Laboratories)

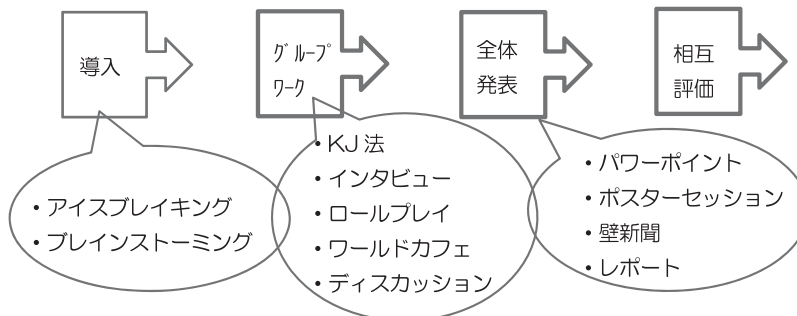


記憶の定着率は、受動的な学習である、講義 (Lecture) が 5%、資料や書籍を読むこと (Reading) が 10%、視聴覚 (Audiovisual) が 20%、実演によるデモンストレーション (Demonstration) が 30% であるのに対して、能動的な学習である、グループディスカッション (Discussion Group) が 50%、実践による経験・体験・練習 (Practice Doing) が 75%、誰かに教えること (Teaching Others) が 90% を示しています。

そこで、「特別活動論」では、ワークショップの手法である「グループワーク」を授業に取り入れて進めます。

2 グループワークについて

(1) ワークショップの一般的な流れ

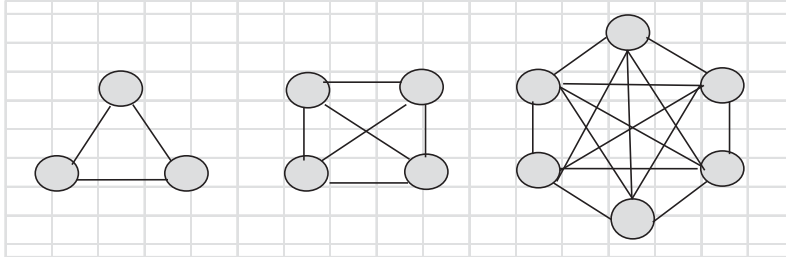


テキストの手引

(2) グループ編成

一般的には6名のグループで行うことが多いようです。この場合は下の図のように1人が5人との関係を築くことができ、1対1の関係が15通り考えられます。

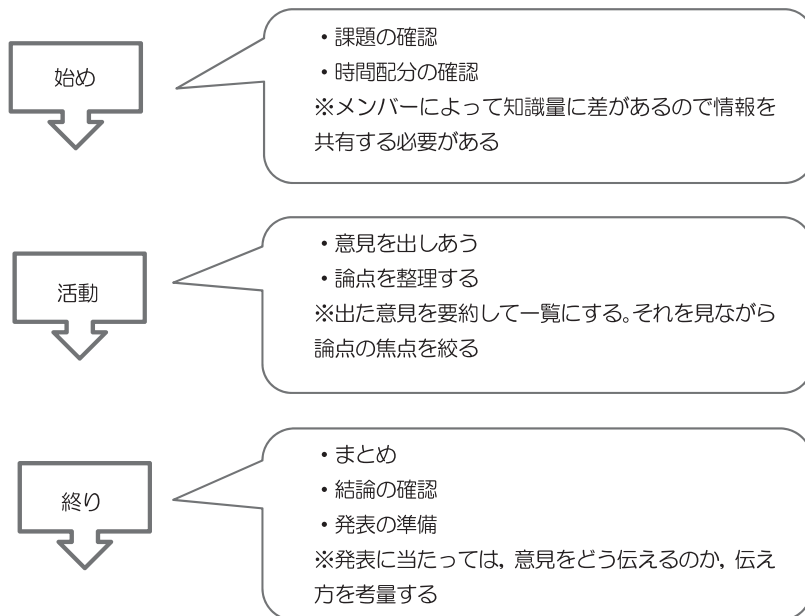
この授業では、課題解決の演習としてグループワークを取り入れているため、対人関係を少なくして3～4名の編成で行いたいと考えています。ただし受講生が多い場合は6名程度でグループを編成して行います。



(3) 授業におけるグループワークで心掛けること

- ・自分の役割と他者の役割を理解すること（ファシリテーターを置く）
- ・他者への支援を心掛けること
- ・目標に沿って協議・議論すること
- ・時間を守って進行すること

(4) グループワークの進行について



第1章 特別活動とは

第1章 特別活動とは

【なにを学ぶのか】

ここでは教育課程に示された「特別活動」の特色を中心に学びます。また、なぜ特別活動が「なすことによって学ぶ」といわれるのかについても理解しましょう。

- 1 教育課程における「特別活動」
- 2 「なすことによって学ぶ」とは

1 教育課程における「特別活動」

（1）「特別活動」は教育課程の一領域

「特別活動」は、学習指導要領に示されている教育課程のひとつの領域です。教育課程における配当総授業時数は学級活動（小学校・中学校）またはホームルーム活動（高等学校）の時数で、他の活動は集中して行われるため、教育課程に示された教科や道徳（小学校・中学校）に代えて行われています。【資料①-1】に現行の中学校学習指導要領の配当総授業時数を示しましたので確認しておきましょう。

中学校や高等学校で行われている『部活動』は、教育課程には含まれません。したがって教育課程外の教育活動として行われています。（部活動の在り方については文部科学省でも教育活動の課題の一つになっています。） ※下線部は次ページの【用語解説】を参照

【資料①-1】中学校の教育課程の基準

学校教育法施行規則別表第2（第73条関係）				
区分		第1学年	第2学年	第3学年
各教科の授業時数	国語	140	140	105
	社会	105	105	140
	数学	140	105	140
	理科	105	140	140
	音楽	45	35	35
	美術	45	35	35
	保健体育	105	105	105
	技術・家庭	70	70	35
	外国語	140	140	140
道徳の授業時数		35	35	35
総合的な学習の時間の授業時数		50	70	70
特別活動の授業時数		35	35	35
総授業時数		1015	1015	1015

第1章 特別活動とは

○ 学校教育法施行規則

第72条 中学校の教育課程は、必修教科、選択教科、道徳、特別活動及び総合的な学習の時間によって編成するものとする。

2 必修教科は、国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育、技術・家庭及び外国語の各教科とする。

【用語解説】

- ・学習指導要領⇒全国の教育内容の共通性を確保するために国が定める教育課程の基準であり、学校教育法の委任に基づく法規命令としての性質を持つ。
- ・教育課程 ⇒学校教育の目的や目標を達成するために、教育の内容を児童・生徒の心身の発達に応じ、授業時数との関連において総合的に組織した学校の教育計画。

(2)「特別活動」の内容

特別活動は、学級（ホームルーム）活動、生徒会（児童会）活動、学校行事を活動の内容としています。小学校は、これらにクラブ活動が加わります。学校種による違いは下に示した通りです。特別支援学校はこれらに準じた活動を行いますが、少人数からくる種々の制約を解消する工夫や、児童又は生徒の障害の状態や特性等を考慮して、活動の種類や時期、実施方法等を適切に定めることが求められています。

- | | | | | |
|-------|------------|-------|-------|------|
| ・小学校 | ⇒ 学級活動 | 児童会活動 | クラブ活動 | 学校行事 |
| ・中学校 | ⇒ 学級活動 | 生徒会活動 | 学校行事 | |
| ・高等学校 | ⇒ ホームルーム活動 | 生徒会活動 | 学校行事 | |

(3)「特別活動」の配当時間

特別活動は、年間総授業時数に配当される時間だけでは収まらない活動です。総授業時数を超えた時間の活動が期待されています。そのため、学習指導要領では、「総則」で特別活動に充てる授業時数に触れ、「必要がある場合には、各教科・科目の授業を特定の学期又は特定の期間（夏季、冬季、学年末の休業日の期間に授業日を設定する場合を含む。）に行う事ができる。」と示されています。

○高等学校学習指導要領「総則」

第4款 各教科・科目、総合的な学習の時間及び特別活動の授業時数等

- 1 全日制の課程における各教科・科目及びホームルーム活動の授業は、年間35週行うことを標準とし、必要がある場合には、各教科・科目の授業を特定の学期又は特定の期間（夏季、冬季、学年末の休業日の期間に授業日を設定する場合を含む。）に行う事ができる。
- 4 ホームルーム活動の授業時数については、原則として、年間35単位時間以上とするものとする。
- 5 生徒会活動および学校行事については、学校の実情に応じて、それぞれ適切な授業時数を当てるものとする。

第1章 特別活動とは

(4)「自由研究」が「特別活動」の出発点

1947(昭和22)年に示された学習指導要領一般編(試案)には、「自由研究」という領域があり、それには、「学校の放課後に何らかの時間をおいて児童生徒の活動を伸ばし、学習を深く進めるための活動」で「個性を伸ばしていくこと」と記されていました。また、「どの児童生徒も同じことを学ぶ時間としない」、「学年の区別を去って、同好のものが集まって、教師の指導とともに、上級生の指導もなされ、いっしょになって、その学習を進める組織」とか「自発的な活動のなされる余裕の時間として、個性の伸長に資し、教科の時間内では伸ばしがたい活動」に時間を当てることと記されていました。これが特別活動の始まりです。次の【資料①-2】を見て、特別活動の変遷にも着目しましょう。

【資料①-2】特別活動の変遷

※「学習指導要領」における名称及び内容		
小学校	中学校	高等学校
自由研究		
学習指導要領 一般編(試案) 1947(昭和22)年		
1.教科の発展としての自由な学習 2.クラブ組織による活動 3.当番の仕事や、学級要員としての仕事	特殊教科活動 / 1949年 「新しい中学校の手引」の中で用いられたのみ	「新制高等学校の教科課程に関する件」 (1947)に「その他(自由研究)」と記載
↓	↓	↓
教科以外の活動	特別教育活動	
学習指導要領 一般編(試案) 1951(昭和26)年 学校の経営や活動に協力参加する活動 学級を単位としての活動	学習指導要領 一般編(試案) 1951(昭和26)年 ホームルーム、生徒会、クラブ活動、 生徒集会	
↓	↓	↓
特別教育活動	特別教育活動	
1958(昭和33)年告示	1958(昭和33)年施行	
児童会活動、学級会活動、クラブ活動	生徒会活動、クラブ活動、学級活動	
↓	↓	↓
特別活動	特別活動	教科以外の教育活動
1968(昭和43)年告示 1971(昭和46)年施行 児童活動(児童会活動、学級会活動、クラブ活動) 学校行事、学級指導	1969(昭和44)年告示 1972(昭和47)年施行 生徒活動(生徒会活動、クラブ活動、学級活動) 学級指導、学校行事	1970(昭和45)年告示 1973(昭和48)年施行 ホームルーム、生徒会活動、クラブ活動、 学校行事
↓	↓	↓
特別活動	特別活動	
1977(昭和52)年告示	1981(昭和56)年施行	
児童活動(学級会活動、児童会活動、クラブ活動) 学校行事、学級指導	生徒活動(学級会活動、生徒会活動、クラブ活動) 学校行事、学級指導	
↓	↓	↓
特別活動		
1989(平成元)年告示 1992(平成4)年施行 学級活動、児童会活動、クラブ活動、 学校行事	1989(平成元)年告示 1993(平成5)年施行 学級活動、生徒会活動、クラブ活動、 学校行事	1989(平成元)年告示 1994(平成6)年施行 ホームルーム、生徒会活動、クラブ活動、 学校行事
↓	↓	↓
特別活動	特別活動	
1998(平成10)年告示	2002(平成14)年施行	
学級活動、児童会活動、クラブ活動、 学校行事	学級活動、生徒会活動、学校行事	
↓	↓	↓
特別活動		
2008(平成20)年告示 2011(平成23)年施行 学級活動、児童会活動、クラブ活動、 学校行事	2008(平成20)年告示 2012(平成24)年施行 学級活動、生徒会活動、学校行事	2008(平成元)年告示 2013(平成25)年施行 ホームルーム活動、生徒会活動、学校行事

- ・自由研究 ⇒1947(昭和22)年 学習指導要領一般編(試案)
- ・特別教育活動 ⇒1951(昭和26)年 学習指導要領一般編(試案)
※小学校は「教科以外の活動」 1958(昭和33)年
- ・特別活動 ⇒1968(昭和43)年 小学校 1969(昭和44)年 中学校
※高等学校は「教科以外の教育活動」 1978(昭和53)年

①小学校「特別活動」の目標

集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする多様な集団活動を通して、望ましい認識がもてるようにするとともに、集団の中で自己を生かす能力を養っていくことを示している。

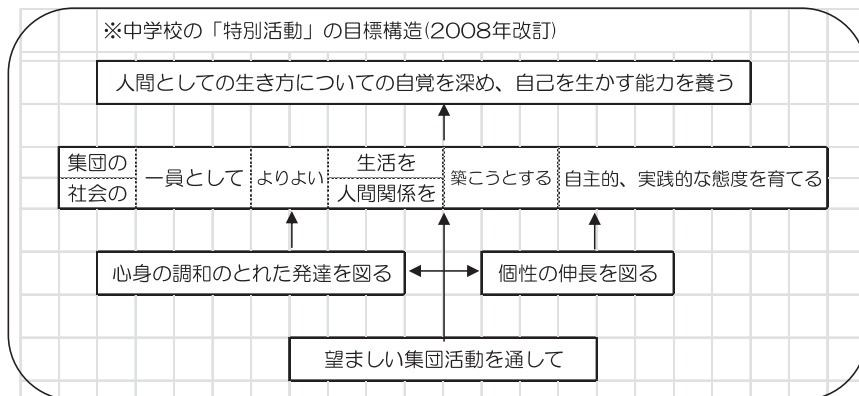
自己の判断力、価値観を養い、主体的に物事を選択決定し、責任ある行動をすることができるよう、人間としての生き方についての自覚を深めさせ、集団や社会の中で自己を生かす能力を養わせていくことが大切である。

自己をありのままに認め、自己に対する洞察を深めること、これらを基盤に自らの追求しつつある目標を確立し、また明確化していくことが大切である。

第1章 特別活動とは

④目標の「構造図」

中学校の特別活動の目標を構造図に表すと下記のようになります。一番下の「望ましい活動を通して」は特別活動の「特質」ととも言えます。また最上段の枠から、特別活動は「自己実現」を図る活動と理解することができます。他のフレームの意味についても考えてみましょう。



【資料①-3】中学校「特別活動」の各活動の目標

- ・学級活動 → 学級活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸課題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる。
※ (週1回×35・・・年間35時間)
- ・生徒会活動 → 生徒会活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団や社会の一員としてよりよい学校づくりに参画し、協力して諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度を育てる。
- ・学校行事 → 学校行事を通して、望ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養い、協力してよりよい学校生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。

2 「為すことによって学ぶ」とは

(1) 特別活動の教育的意義

① 集団活動の特質とすること

中学校及び高等学校の『学習指導要領解説 特別活動編』には、「一人一人の生徒が様々な集団に所属して活動することによって、生徒の人間関係も多様になり、生活経験も豊富になるなど、他の教育内容とは異なる意義が認められる。また、これらの活動を通して、好ましい人間関係を形成するために必要な能力や態度、所属する集団の充実・向上に努め

第1章 特別活動とは

ようとする態度、社会の一員としての自覚と責任ある態度、人間としての生き方を探究し自己を生かす能力や態度などが養われることが期待される。」と記されています。

小学校の同書には「児童が種々の集団に所属して活動することにより、人間関係が拡充され、生活経験が豊かになるとともに、思いやりの心、ともに生きていく態度、自己責任の自覚、自律・自制の心など豊かな人間性や社会性を身につける事ができるのであり、特別活動には、他の教育活動とは異なる役割がある」と記し、このような特色は「特別活動に特に顕著なもの」と結んでいます。

② 実践的な活動を特質とすること

更に中学校及び高等学校の『学習指導要領解説 特別活動編』には次のように記されています。「特別活動は、実際の生活経験や体験活動による学習、すなわち「なすことによって学ぶ」ことを通して、全人的な人間形成を図るという意義を有している。実際の生活体験を通して教師と生徒及び生徒相互の直接的な触れ合いが緊密になり、学校や学級の生活が明るく豊かになり、しかも有意義な変化をもたらすことが期待できるのである。また「なすことによって学ぶ」ことを通して、教科等で学んだことを総合化し、生活や行動に生かすという自主的、実践的な態度を育てることができる。このような活動は、活動の内容や場面も多様であり、創意工夫の余地も広いので、学校生活全般にわたって生徒の積極的な意欲を育てるために適切な機会となる。」

続いて特別活動の教育的意義として次の5点を挙げています。

- ア 集団や社会の一員として、なすことによって学ぶ活動を通して、自主的、実践的な態度を身につける活動である。
- イ 教師と生徒及び生徒相互の人間的な触れ合いの基盤とする活動である。
- ウ 生徒の個性や能力の伸長、協力の精神などの育成を図る活動である。
- エ 各教科、道徳、総合的な学習の時間などの学習に対して、興味や関心を高める活動である。また、逆に、各教科等で培われた能力などが総合・発展される活動でもある。
- オ 知、徳、体の調和のとれた豊かな人間性や社会性の育成を図る活動である。

【演習①-A】

高等学校の特別活動の目標に掲げられている「人間としての在り方生き方についての自覚を深める」ために、高校生の時に行ったことはどんなことでしたか。思い出して 600 字以内で記しなさい。

第2章 学級・ホームルーム活動

第2章 学級・ホームルーム活動

【なにを学ぶのか】

ここでは、中学校の「学級活動」、高等学校の「ホームルーム活動」の内容について、次の3つの項目から学び、学級担任として「為すべきこと」を理解しましょう。

- 1 学級（ホームルーム）とは
- 2 学級（ホームルーム）活動
- 3 学級経営の課題 (資料) 学級活動 年間指導計画(例)

1 学級（ホームルーム）とは

(1) 学級とホームルームの区別

学級（ホームルーム）とは、学校において教育活動が行われる単位集団で、教科指導や生活指導の基本的な『場』となっています。高等学校学習指導要領では「ホームルーム」と表記しています。小学校や中学校は学級が教科活動の『場』であるのに対し、選択制の教科活動が多くなる高等学校でも、中学校と類似した集団的活動を必要とするという意味で区別した表記にしています。

学級（ホームルーム）は、生徒が所属する集団で、一般的には、機械的に分割される「所属集団(Membership Group)」が、さまざまな活動を通して「帰属集団(Reference Group)」に進化するといわれています。従って、担任は、さまざまな活動を通して集団を進化させる責務を担うことになります。

(2) 学級の分類と種類

学級は、「普通学級と特別支援学級」、または「一般学級と重複障害学級」に分けて運営されています。特別支援学級は、学校教育法第81条2項で、「小学校、中学校、高等学校及び中等教育学校には、次の各号のいずれかに該当する生徒及び生徒のために、特別支援学級を置くことができる。」と定められたものです。各号は次の通りです。

- 1 知的障害者
- 2 肢体不自由者
- 3 身体虚弱者
- 4 弱視者
- 5 難聴者
- 6 その他障害のある者で、特別支援学級において教育を行うことが適当なもの

特別支援学級は、地方公共団体によって「養護学級、障害児学級、総合学級」など、さまざまな呼び方をしています。横浜市では「個別支援学級」と呼んでいますし、東京都では健康障害の生徒のために「健康学園」という学校を設置しています。

また、同一学年で編成する「単式学級」に対して2学年以上で編成する「複式学級」という分類もあります。

第2章 学級・ホームルーム活動

(3) 学級の定員

普通学級の定員は、「公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律」により、小学校1年生が35名、小学校の他の学年及び中学校は40名が1学級の上限になっています。ただし、この定員は標準であって、地方公共団体の教育委員会が、「当該学校の生徒又は生徒の実態を考慮して」行うことができるようになりました。

特別支援学級の定員は8名です。特別支援学級が、すべての学校に設置されているわけではないので学区を超えて通学する児童生徒もいます。

(4) 学級（ホームルーム）の機能

学級（ホームルーム）は、学校教育目標を具現するために設けられた組織であり、集団思考や共同作業を通して教科学習の活発化をねらう「学習集団」と、集団意識や道徳性・公民性の育成をねらう「生活集団」のふたつの機能を持つのが一般的です。

そのために行われる学級（ホームルーム）活動は、次の二つに大別されます。

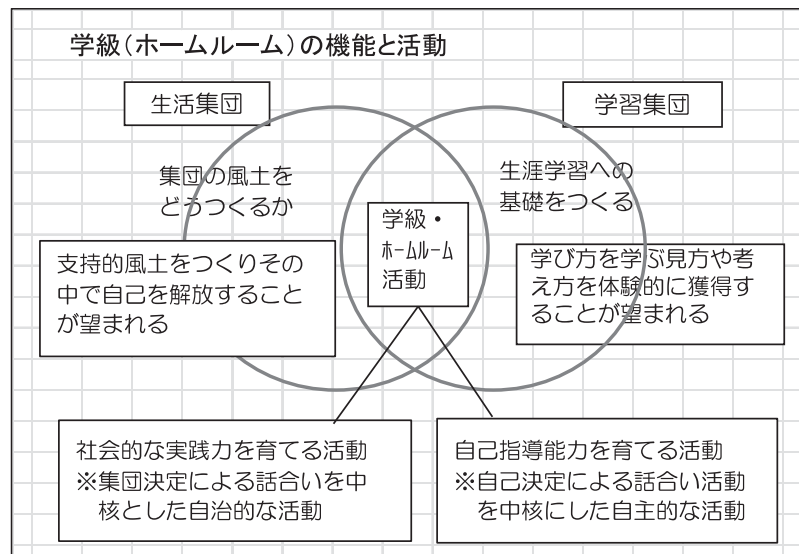
ア 社会的な実践力を育てる活動

イ 自己指導能力を育てる活動

ともに学級生活や学校生活を教材として、アは集団決定による話し合いを中核とした自治的な活動であり、イは自己決定による話し合い活動を中核にした自主的な活動と言えます。

ここで記した「自己指導能力」とは、その時、その場で、どのような行動が適切であるか、自分で判断し、決定して実行する能力と一般的には理解されています。

下の図を用いて二つの機能と学級（ホームルーム）活動の関係を確認してみましょう。



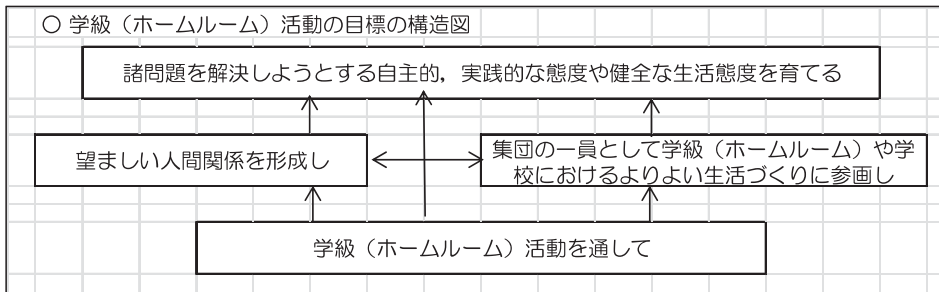
第2章 学級・ホームルーム活動

2 学級（ホームルーム）活動の内容

(1) 学級（ホームルーム）活動の目標

学習指導要領は、学級（ホームルーム）活動の目標を次のように示しています。目標には特別活動の内容に共通する「望ましい人間関係」と「自主的、実践的な態度」の二つの柱があります。二つの柱の説明をここで補っておきます。また、目標の構造図に目を通して二つの柱の関係を確認しておきましょう。

学級（ホームルーム）活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる。



① 望ましい人間関係

「望ましい人間関係」は、豊かで充実した学級（ホームルーム）生活づくりのため、次のことに留意した生活から築かれます。

- ア 生徒一人一人が自他の個性を尊重
- イ 集団の一員としてそれぞれが役割と責任を果たす
- ウ 互いに尊重し、よさを認め発揮し合えるような開かれた人間関係

② 自主的、実践的な態度

「自主的、実践的な態度」は、望ましい人間関係を主体的に形成する次のような態度を指します。特に「参画」することの意味を考えてみましょう。

- ア 学級（ホームルーム）や学校づくりに参画する
- イ 生活の中で起こる様々な問題や課題について積極的に取り組み解決していこうとする態度

(2) 学級（ホームルーム）や学校の生活づくり

① 基礎的な生活の場

「学級（ホームルーム）の機能」で説明したように、中学校の「学級」は生徒にとって各教科等の授業を受ける場であるとともに、学校生活を送る上での基礎的な生活の場です。高等学校の「ホームルーム」は、生徒にとって生活を送る上での基礎的な生活の場であり、

第2章 学級・ホームルーム活動

ここを基盤として、各教科・科目等の授業、さらには教育課程外の様々な活動が展開されます。

したがって、学校生活への適応も含めて解決しなければならないさまざまな問題に取り組むとともに、学級（ホームルーム）や学校における集団生活をつくり上げていくことはとても大切なことなのです。学習指導要領に示された中学校と高等学校の活動内容は次の通りです。

(1) 学級や学校の生活づくり（中学校）	(1) ホームルームや学校の生活づくり（高等学校）
ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決	ア ホームルームや学校における生活上の諸問題の解決
イ 学級内の組織づくりや仕事の分担処理	イ ホームルーム内の組織づくりと自主的な活動
ウ 学校における多様な集団の生活の向上	ウ 学校における多様な集団の生活の向上

② 学級（ホームルーム）経営とは

学校（ホームルーム）経営とは、学級（ホームルーム）を単位として展開される生徒の学習活動や集団活動が有効に成立するよう、人的・物的・運営的諸条件を総合的に整備し運営することです。したがって、学校及び学年の教育目標を具現化する一つの機能として捉えることができます。また、生徒の学校生活を支える基軸になるもので、具体的には学級指導、学習指導、教室環境整備、事務処理、公簿処理、保護者会の運営や保護者への連絡（学級だよりなど）、会計事務等があり、学級（ホームルーム）経営が安定していると、生徒の心も行動も安定します。次に中学校における「学級づくり」を【資料②-1】に紹介します。

【資料②-1】学級づくり

1 学級づくりの基本

(1) 学級の民主的なルールづくり

ア 学習指導の基本的な考え方 【授業の受け方・学習活動】

イ 生活指導の基本的な考え方 【生徒指導確認事項】

(2) 学級生活（文化）づくり

ア 学校行事との関連

イ 生徒会活動との関連

2 教員の創造性を生かした「学級の組織づくり」

(1) 係活動、当番活動、集会活動

(5) 朝の会、帰りの会

(2) 生徒会活動（生徒会、委員会等）

(6) 掲示物管理、レク活動

(3) 学校行事

(7) 教室整備・管理

(4) 話し合い活動

3 学級内係活動決め

(1) 係活動とは

ア 生徒の創意工夫が生かされたもの

イ クラス全体の文化を高めるもの

第2章 学級・ホームルーム活動

- (2) 当番活動を機能させるシステムづくり(35人がいれば全員が分担して行う)
- (3) 活動を充実させるシステムづくり(時間・場所・物の確保など)

4 係活動における効果的な実施方法

(1) 学級経営と係活動

集団が生き生きと活動し、機能していくためには、その集団の成員が役割を分担し、力を発揮していくことが不可欠です。学級においては、係活動がその主な場になります。「係の活動は、学級の生徒が、学級内の仕事を分担処理するために、幾つかの係に分かれて自主的に行う活動であり、生徒の力で学級生活を豊かにすることをねらいとしている。」のです。生徒は、この活動を通して、自分たちの学級生活上の問題や仕事に目を向け、それぞれの個性や能力を生かしながら、学級生活を向上・発展させようと、自発的に仕事を分担して活動に参加・参画していきます。このような係活動を通して、生徒は集団活動の喜びを体得していきます。また、人間関係のあり方についても、経験させることができます。

(2) 係活動、当番活動の意義

学級における係活動、当番活動には、次のような教育的意義が考えられます。

- ア 内容のある望ましい集団活動を育てる
- イ 勤労意欲を高め、正しい勤労観を育てる
- ウ お互いの連帯意識を育てる
- エ 社会性を育てる
- オ 消極的な態度からの脱皮を図る
- カ 自己実現のための自主性を育てる
- キ 信頼関係を育てる

(3) 係活動と当番活動のちがい

係活動の仕事を生徒に考えさせると、様々なことを発見してくれます。しかし、それらの仕事の中には、教員が行う管理的なことや補助的なことがたくさんあるので、係活動と当番活動の違いを明確にして、指導していく必要があります。

(4) 係活動を設置するための条件

- ア 自分たちの学級に必要な係であること
- イ 係活動と当番活動のちがいをはっきりさせること
- ウ 分担した仕事内容が負担にならないこと
- エ 継続的に活動できること
- オ 生徒のアイディアが生かされること
- カ 好きな係であること
- キ グループ編成に配慮すること

(5) 評価の在り方

係活動の評価は、教員のもつねらいを先行させるのではなく、生徒の自己評価や相互評価を大切にしなければなりません。教員は、生徒が自己の活動を振り返り、自らの課題を見つけだすことによって、意欲的な活動を継続できるように支援します。

第2章 学級・ホームルーム活動

(3) 適応と成長および健康安全

この活動は、生徒一人一人が人間としての(在り方)生き方について幅広く探求し、心身の健康の保持増進に努め、豊かな人間性や個性の育成を図るとともに、社会の成員として必要とされる資質や能力を培っていくための最も基礎的な活動です。

次に学習指導要領に示された活動内容を載せましたので、「人間としての生き方」を探求する中学校と「人間としての在り方生き方」を探求する高等学校の活動の違いに注目してみましょう。また【資料②-2】に学級（ホームルーム）担任による教育相談を整理しました。しっかり読んで教育相談の概要を理解しましょう。

(2) 適応と成長及び健康安全（中学校）	(2) 適応と成長及び健康安全（高等学校）
ア 思春期の不安や悩みとその解決	ア 青年期の悩みや課題とその解決
イ 自己及び他者の個性の理解と尊重	イ 自己及び他者の個性の理解と尊重
ウ 社会の一員としての自覚と責任	ウ 社会生活における役割の自覚と自己責任
エ 男女相互の理解と協力	エ 男女相互の理解と協力
オ 望ましい人間関係の確立	オ コミュニケーション能力の育成と人間関係の確立
カ ボランティア活動の意義の理解と参加	カ ボランティア活動の意義の理解と参画
キ 心身ともに健康で安全な生活態度や習慣の形成	キ 国際理解と国際交流
ク 性的な発達への適応	ク 心身の健康と健全な生活態度や規律ある習慣の確立
ケ 食育の観点を踏まえた学校給食と望ましい食習慣の形成	ケ 生命の尊重と安全な生活態度や規律ある習慣の確立

【資料②-2】学級（ホームルーム）担任による教育相談

いじめや不登校、生徒虐待の深刻化や少年非行・犯罪等に適切に対応するため、学級（ホームルーム）担任による教育相談は有効な手段のひとつであり担任が行う大切な仕事です。

1 担任による教育相談とは

生徒の持つ悩みや困難の解決を支援することによって、学校生活によく適応させ、人格の成長を促すものです。

(1) 学級（ホームルーム）担任が行う教育相談の利点

- ア 早期発見・早期対応が可能
- イ 支援しやすい
- ウ 連携が取りやすい

(2) 学級（ホームルーム）担任が行う教育相談の課題

- ア 実施者と相談者が同じ場にいることによる難しさがある
- イ 担任が教育相談を行う場合の「葛藤」がある

2 学級（ホームルーム）担任が行う教育相談の種類

(1) 学業相談（educational counseling）

一般的に学習の習慣や勉強の技術に関するもので次のようなことが考えられます。

第2章 学級・ホームルーム活動

- ア 学習計画の立て方,
- イ 能率的な勉強法
- ウ 授業の受け方,
- エ 効果的な記憶術
- オ 参考書や問題集の利用法
- カ ノートの取り方や作り方
- キ 試験の受け方・答案の書き方

(2) 進路相談 (vocational counseling)

将来の進学や就職に関する相談で、可能性をより大きく残して前進を図ることが大切です。そのためにも次の情報について個人ごとに整理しておく必要があります。

- ・能力
- ・適性
- ・興味
- ・健康状態
- ・家庭事情

自己の適性や能力や興味などに関係せず
学力偏差値や模擬試験の成績だけで判断
してはならない

(3) 情緒適応相談 (personal counseling)

個人および集団の一員としての在り方に関することが一般的で、次のような「不安感」や「劣等感」などが考えられます。

- ・新しい学校生活への適応
- ・個人的な悩みや不安の解消
- ・望ましい人間関係の確立

また、性格や情緒面に問題を抱える「神経症」や「対人恐怖」などの場合は専門医の診断を必要とすることもあります。

3 教育相談時における生徒との関わり方

生徒の不安を払いのけ、信頼関係を築くことが大切で、特に次のような関わり方が考えられます。

ア 傾聴 (聴いてもらっているという安心感)

生徒の言葉に真剣に耳を傾ける (うなずく、繰り返す)

イ 受容 (情緒的な動きの取れなさを感じ取る)

生徒をありのままに受け入れる (ゆっくりかかわる、情緒的な動きを感じ取る)

ウ 生徒への限らない信頼 (自信と勇気に気付かせる)

生徒の自己指導の力を信頼する (一緒に話し合う、気づきにかかわる)

エ 教員の自己一致 (教員としての生き方を持つ、教員の純粋性)

教員自らが持つ純粋性を大切にする (情緒的なかわり、生き方を持つ)

第2章 学級・ホームルーム活動

(4) 学業と進路

① 夢や希望の実現

この活動は、生徒が、自己の将来に夢や希望を抱き、意欲的かつ主体的に学習に取り組むとともに、将来の生き方や進路に関する体験を得たり、情報の活用を図ったりしながら、自己の個性や学習の成果を生かす進路を自らの意志と責任で考え、選択決定していくことの大切さを学ぶためのものです。

高校生は、加えて夢や希望の実現をめざして、今、何を学ぶべきかを考え、自らすすんで学習に取り組む意欲を持ち、教科・科目や類型等を選択することも含まれます。次に学習指導要領に示された中学校と高等学校の活動内容を載せましたので比較してみましょう。

(3)学業と進路（中学校）	(3)学業と進路（高等学校）
ア 学ぶことと働くことの意義の理解	ア 学ぶことと働くことの意義の理解
イ 自主的な学習態度の形成と学校図書館の利用	イ 主体的な学習態度の確立と学校図書館の利用
ウ 進路適性の吟味と進路情報の活用	ウ 教科・科目の適切な選択
エ 望ましい勤労観・職業観の形成	エ 進路適性の理解と進路情報の活用
オ 主体的な進路の選択と将来設計	オ 望ましい勤労観・職業観の確立
	カ 主体的な進路の選択決定と将来設計

② 学習指導

学習指導は、学級（ホームルーム）を「学びに向かう集団」に高めながら、生徒一人一人が自らの力で様々な不適応を解消し意欲的に学習活動に取り組めるように指導・支援する作業です。学校での学習指導のみならず、家庭での計画的な自主学習の指導も含みます。大切なことは、学習方法についての意見交換を行いながら、生徒一人ひとりが自分に合った学習方法を考え、学習意欲を高めて、その後の学習方法に生かすことです。そのために次のことに注意して取り組むことが大切です。

- ア 学級内で生徒同士が学び合う雰囲気をつくる
- イ 学習意欲が高い生徒と低い生徒の二極化しないように工夫する
- ウ 家庭学習の習慣化を図る

③ 中学校で学習活動を支援した二つの例

〔A〕「教科学習係」の活動

学級の生徒組織に、教科担当の「係」を設け、帰りの学級活動（SHR）で、明日の授業の連絡（内容、持ち物、宿題など）の確認を行いました。さらに当日の教室の移動の連絡や用具の準備（教室まで運ぶ等）のほか、定期考査前に、予想問題を作成して放課後に学習会を行うなどの“助け合い学習”にも取り組みました。また、実技教科では体育の鉄棒や、音楽のリコーダーでも放課後に練習の時間を設けて補助しました。

第2章 学級・ホームルーム活動

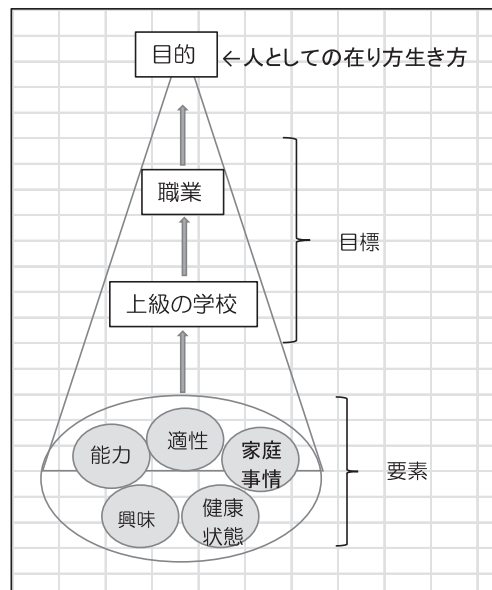
〔B〕「助け合い学習」の実践

学級は生活班を中心に活動しました。その班ごとに、宿題の補助などを放課後に行ないました。全県一斉の学力テスト前は、日曜日に学習会を行ったこともあります。また、欠席したともだちへの支援として、欠席者のノート作成を班で行いました。インフルエンザで欠席者が増えたときは、担任がコピーし各家庭に放課後届けました。これは、生徒の提案で始まった活動のひとつで、コピーが普及している現在なら簡単なことですが、当時は班員が欠席者のノートを分担して整理しました。休んでいる者への思いを形にして渡すという活動は、その思いがさまざまな場面に波及していきました。

④ 進路を考える

進路を考えることは、人としてどう生きるのかを考えることです。したがって、上級の学校や職業の選択は目標にはなり得ますが、目的にはいきません。

【資料②-2】の進路相談に示したように、生徒の「能力・適性・興味・健康状態・家庭の事情」などを踏まえて、人としてどのような生き方をしたいのかを模索してことが大切です。そしてその途中に上級の学校や職業があることを理解して選択決定していくことが求められるのです。



(5) 学級（ホームルーム）活動の指導計画の配慮事項

指導計画を作成する際には、次のことに配慮する必要があります。学級（ホームルーム）活動に充てる授業時数は年間 35 時間です。高等学校では 1 単位分ですが、卒業に必要な単位には含まれません。

次に中学校の指導計画例を【資料②-3】として載せました。

- ア 学校の創意工夫を生かすとともに、学校の実態や生徒の発達の段階などを考慮し、生徒による自主的、実践的な活動が助長されるようにする
- イ 各教科、道徳及び総合的な学習の時間などの指導との連携を図る
- ウ 家庭や地域の人々との連携、社会教育施設等の活用などを工夫する
- エ 生徒指導及び教育相談の充実を図る
- オ ガイダンス（助言指導）機能を充実する

第2章 学級・ホームルーム活動

【資料②-3】

横浜市立〇〇中学校 学級活動 年間指導計画（全学年共通）					
目標	学級活動を通して望ましい人間関係を形成し、集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる				
期	学級づくりのポイント・ねらい		(1)学級や学校の生活づくり	(2)適正と成長及び健康安全、(3)学業と進路、題材設定の視点	生徒会活動と学校行事
前期	○学級目標づくり ○組織づくり 学級・生徒会	望ましい集団活動を通し、その在り方や進め方について理解を深め、互いのよさや自分らしさを発揮し、学級生活に対する明るい希望を抱く	学級の組織・学級目標づくり、宿泊行事・校外学習の取り組み (修学旅行・自然教室等) 生徒総会に向けて 体育祭に向けて 学年行事への取り組み	・〇年生になって ・中学校の生活と約束について ・学業と進路について 学習計画、学ぶことの意義、将来への夢や希望、職業と適性 等 ・保健指導に関連して（健康・安全） ・夏休みの計画（学習・読書計画） ・防災安全学習	始業式 入学式 新入生を迎える会 健康診断 旅行・集団宿泊の行事 ①選足 ②自然教室 ③修学旅行 開校記念式 生徒総会 体育祭 前期中間試験 個人面接 大掃除
	○行事等への主体的な取り組みを通した自他のよさの伸長 ・学年行事 ・学校行事				
	○自発的、自治的活動の推進				
	○行事等への主体的な取り組みを通した自他のよさの伸長 ・学年行事 ・学校行事	役割と責任を果たし、互いのよさや自分らしさを発揮した望ましい集団活動を通し、望ましい人間関係を築き、充実した学級生活をつくる	前期の反省	・生活の見直しについて（食育） ・学校行事とのかかわり	前期期末高知 保護者面談 終業式
後期	○後期の組織づくり ○行事等への主体的な取り組みを通した自他のよさの伸長 ・学年行事 ・学校行事		学級組織づくり 文化祭。合唱コンクールの振り返り 生徒会役員選挙に向けて 冬休みに向けて	・文化祭・合唱コンクールの取り組み ・学業と進路について 自己を見つめる進路希望先訪問の報告 等 ・生活・学習について ・健康と安全 ・学業と進路について 面接に向けて 冬休みの計画 等	始業式 文化祭 合唱コンクール 後期中間試験 生徒会役員選挙 個人面談 大掃除
	○自発的、自治的活動の推進 ○集団としての成長の足跡、振り返り	自分たちの思いや願を大切にしたい望ましい集団活動を通して、信頼関係を深め、集団の一員としての自覚を高める	先輩や地域の方のお話から ※卒業式に向けて ※1年間の反省	・学業と進路について 私の悩み あなたの悩み 受験に向けて 等 ・健康と安全について 思春期の心と身体等 ・地域清掃活動への取り組み (ボランティア活動の意義) ・次年度の抱負	キャリア教育 学年末試験 地域清掃活動 卒業式 修了式

(横浜版「学習指導要領 特別活動編」横浜市教育局より作成)

第2章 学級・ホームルーム活動

3 学級経営の課題

(1) 学級崩壊 (学級の荒れ)

中学校における学級経営の課題として「学級崩壊」について考えてみます。これは、生徒が教室内で勝手に行動をして教員の指導に従わず、授業が成立しないなど、集団教育という学校の機能が成立しない学級の状況が一定期間継続し、学級担任による通常の手法では問題解決できない状況に立ち至っている場合を指します。

(2) 学級の崩壊から収束まで

学級崩壊について、4枚のパネルにしました。

よく見て、なぜ引き起こされるのか、どのように解決を図るのかについて考えてみましょう。

① 崩壊の状況

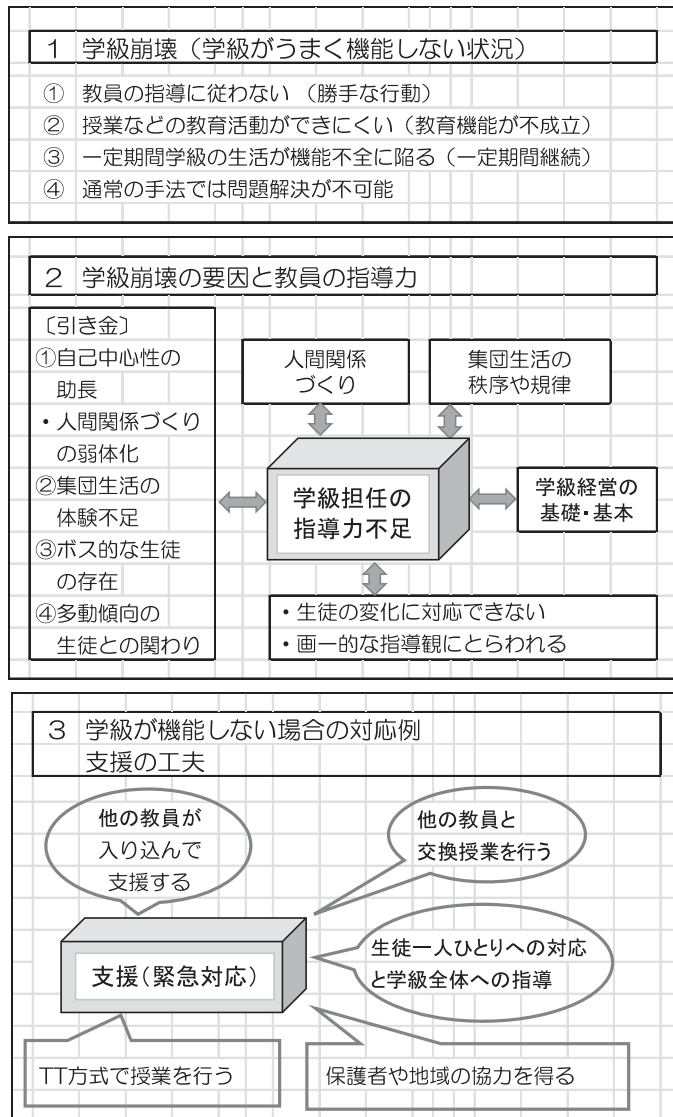
学級経営がうまく機能しない状況で、四つの状況が重なって「崩壊」に至ります。

② 崩壊の要因

人間関係づくりがうまくいかない、集団生活の秩序や規律が維持できないなど、学級担任の指導力の不足が要因で、生徒の自己中心性を助長します。

③ 支援の工夫

「崩壊」に至る前に「支援」することが大切です。支援策は、校長が学校経営者として行う措置ですが、「チーム学校」の取り組みが日頃から行われていることが大切です。

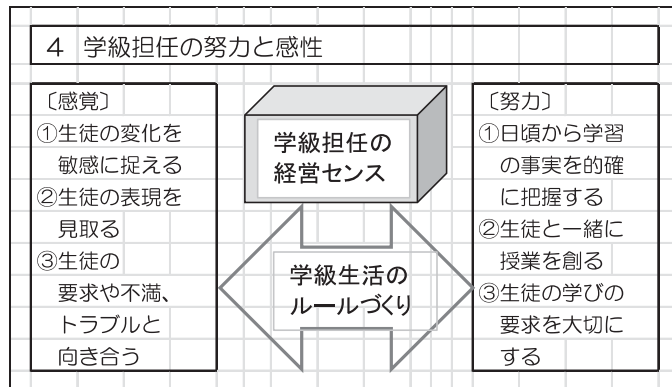


第2章 学級・ホームルーム活動

④ 担任の努力と感性

常日ごろから、学級担任としての感性を磨くために、先輩教員の学級経営に学ぶ姿勢を持ち続けることが必要です。

生徒を観察し、記録を継続して、一人ひとりの変化に気付く努力を怠ってはいけません。



(3) 学級崩壊の防止策としての学級経営

① 学級経営の充実のための取り組み

学級崩壊を招かないためには次のことに留意した「学校経営」が求められます。

- ア 生徒の指導は、最低限指導しなければならないことを共通理解して取り組む
- イ 校内研修で、生徒の変化について事例研究する
- ウ 生徒の変化とその対応について、専門家を招いて助言や指導を受ける。
- エ ティーム・ティーチング等、協力授業を行う
- オ 生徒の変化について、保護者や関係機関と話し合う
- カ 生徒の変化に対応した指導法について校内研修を行う
- キ 教員相互で授業公開し、学級をひらくようにする
- ク 学年集会や合同授業等を恒常化して学年経営の充実を図る
- ケ 学年経営について学年の単位で話し合い、指導協力をする
- コ 交換授業や教員の専門性を生かすよう校内の指導組織を改善する
- サ 一定期間、保護者や地域の人に全学級公開を行う

② 生徒を指導する心構え

生徒との良好な関係を築くためには次のことに留意する必要があります。

- ア 一貫した指導をする(教員がその都度、指導を安易に変えては、生徒は教員を見下ろしてしまう恐れがある)
- イ 家庭の協力を得る(「百人の教師は、一人の親には勝てない」ということわざがある。親の協力をもらうことにより、より効果が期待できる)
- ウ 励ます(単に、生徒にがんばれと言うのではなく、意欲を喚起するような励まし(声かけ)が大切である)
- エ 見届け(しっかり見届けすることにより生徒は教員を信頼するようになってくる)
- オ キーワードは、「教えてほめる」
「先生にほめられる」と、生徒は、うれしくて意欲が増す。特に出会いの3日間が勝負である。しっかり教え、ほめることが必要です。

第2章 学級・ホームルーム活動

【演習②-A】

中学校の特別活動「学級活動」の目標に掲げられている「望ましい人間関係を形成し、集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸課題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる。」ための下記の資料を参考にし、指導展開例を作成しなさい。

※資料は高橋正尚氏が小学館で連載した「学級経営の資料とアイデア」から提示します。

3年 ■7月の学級経営の資料とアイデア 友達から学ぶもの—『Xさんからのメッセージ』から自分を見つめよう


- 一学期の生活面を振り返るために、友達が自分をどのように評価しているかのメッセージを交換し、自分のよいところや課題などを客観的に考えさせ、今後の生活に役立てる手だてとする。
- 方法
- (1) 六人の班をつくり、二種類のカードを一人一枚ずつ配布する。
 - (2) 一人で他の五人の班員について『学校生活の中で気付いた〇〇君(さん)のよいところ、よい行動』と『〇〇君(さん)のここを直せばもっと成長するよ』の二枚のカードに記入する。(資料1)
 - (3) カードを班員から受け取り、自分について個人票にまとめる。(資料2)
 - (4) 資料2を基に、家庭で話し合う。
 - (5) 資料2を担任に提出する。
- 留意点
- 担任は資料に基づいて面談を実施し、家庭での話し合いの結果や生活面の課題を確認する。

【資料1】 メッセージカードの例

- ・色画用紙でつくり2種類のカードを色分けする。
- ・カードの大きさは8cm×12cmが適当である。

メッセージカード(裏)


天崎あかねさんへ



(大江佳弘より)

※表に相手の名前と自分の名前を書く。なるべくかわいい模様のカットをつけてあげるとよい。

天崎あかねさんへ



(大江佳弘より)

※相手の似顔絵を工夫してかく。

メッセージカード(表)

〈学校生活の中で気付いた〇〇君・さんのよいところ、よい行動!〉

○そうじや係活動などに黙々とがんばっている。

○学級に花をときどき持ってきてくれる。

〈〇〇君・さんのここを直せばもっと成長するよ!〉

○言葉づかいが悪い。もう少し相手の気持ちを考えて話しましょう。

※相手を傷つけるような言葉でなく、励ましの言葉になるように配慮する。

【資料2】 一学期の生活面を振り返ろう!

一学期の生活面を振り返ろう!

3年1組(1)番(大坪朋弘)

<p>〈友達が見つけたよいところ・よい行動〉</p> <p>○友達に対して親切で相談相手になってくれる。</p> <p>○身の回りをいつもよく整理している。</p> <p>○約束を守る。</p>	<p>〈自分の感想・意見〉</p> <p>○よいところが意外とあるな!! 2学期はもっと増やしたい。</p>	<p>〈家庭で話し合った結果を記入する。〉</p> <p>身の回りの整理整頓は家庭でもよく心がけているようです。時間の使い方は上手ではありません。夏休みは一日の計画をしっかりと立て、リズムのある生活態度を望みます。</p> <p>※保護者の方がご記入ください。</p>
<p>〈友達が見つけた、ここを直せばもっと成長するよ〉</p> <p>○時間にルーズです。チャイム着席が守られていません。</p> <p>○教科係の仕事をおぼれずにやってほしい。</p>	<p>〈自分の感想・意見〉</p> <p>○チャイム着席については自分では気を付けているつもりだが、ときどき失敗をしてみよう。</p> <p>○教科係の仕事は教科担任の先生とよく連絡をとり正確にみんなに伝えたい。</p>	

(高橋正尚)

第2章 学級・ホームルーム活動

【演習②-B】

中学3年生の学級担任として4月の始業式後の「学級びらき」での話を次の点に注意して考えてみましょう。

- ア 新しい学年のスタートは中学3年生になった生徒でも、期待に胸を弾ませている
 イ 学級びらきは、生徒の期待に応え、学級づくりの第一歩として印象深いものにする
 ウ 義務教育最後の年を意識し中学校最後の行事や進路決定をみんなで共に創り上げていく雰囲気をつくり、生徒のやる気と仲間との結びつきを強める活動を行う
 ※次のフォームを参考にして整理しなさい。

個人	学級担任としての抱負								
	具体的な学級担任の方針								
グループ	学級担任としての抱負								
	具体的な学級担任の方針								
「学級開き」相互評価		3段階評価	特に良い＝3点／普通＝2点／いまひとつ＝1点（自分の班は評価しない）						
評価項目	グループ	1班	2班	3班	4班	5班	6班	7班	8班
①	期待に胸を弾ませている生徒の期待に応えられる話ですか								
②	生徒のやる気を出させる話ですか								
③	学級担任としての思いを伝えられる話ですか								
合 計 点									

第3章 生徒会活動

第3章 生徒会活動

【なにを学ぶのか】

ここでは、教員として「生徒会活動」を指導する場合を想定し、活動の支援の在り方を中学校と高等学校を比較しながら考えてみましょう。

- 1 生徒会活動の意義
- 2 生徒会活動の支援のあり方

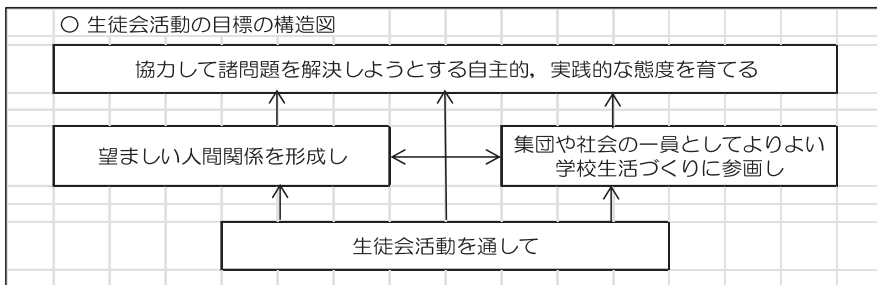
1 生徒会活動の意義

（1）生徒会活動の目標

学習指導要領に示された生徒会活動の目標は、中学校および高等学校とも同じ表記で、次のように記されています。

1 目標

生徒会活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団や社会の一員としてよりよい学校生活づくりに参画し、協力して諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度を育てる。



目標からは、「望ましい人間関係を形成」することと「自主的、実践的な態度を育てる」ことが生徒会活動の重点であると伺えます。この二つについては、すでに11ページで要点を記しましたが、ここでは『高等学校学習指導要領解説 特別活動編』に示された内容を紹介しますので、改めて理解を深めましょう。

① 望ましい人間関係を形成

生徒会活動で育てたい「望ましい人間関係」とは、豊かで充実した学校生活づくりのために、一人一人の生徒が生徒会組織の一員としての自覚と責任感をもち、共に協力し、信頼し支え合おうとする人間関係である。また、ボランティア活動など奉仕の精神を養う社会的活動への参画や協力、他校や小学校・中学校との交流、地域の人々との幅広い交流など、学校外における活動を通して、他者を尊重し、共によりよい集団生活や社会生活を築こうとする開かれた人間関係である。

第3章 生徒会活動

② 自主的、実践的な態度を育てる

生徒会活動で育てたい「自主的、実践的な態度」とは、生徒自ら目標をもち、学校や社会の一員としてよりよい学校生活へ貢献するための役割や責任を果たし、学校生活全体の充実・向上にかかわる問題について、みんなで話し合って協力して解決したり、集団や社会の一員としての自覚に基づき、学校や地域社会の生活の充実・向上に積極的に関わったりしていく自主的、実践的な態度である

(2) 生徒会活動の内容

生徒会活動の内容を中学校と高等学校で比較すると、次のようにほとんど同じものになっています。中学校が「ボランティア活動などの社会参加」としているのに対して、高等学校は「社会参画」としていますが、この違いを確認しておきましょう。

学校の全生徒をもって組織する生徒会において、学校生活の充実と向上を図る活動を行うこと。

- (1) 生徒会の計画や運営
- (2) 異年齢集団による交流
- (3) 生徒の諸活動についての連絡調整
- (4) 学校行事への協力
- (5) ボランティア活動などの社会参加（社会参画）

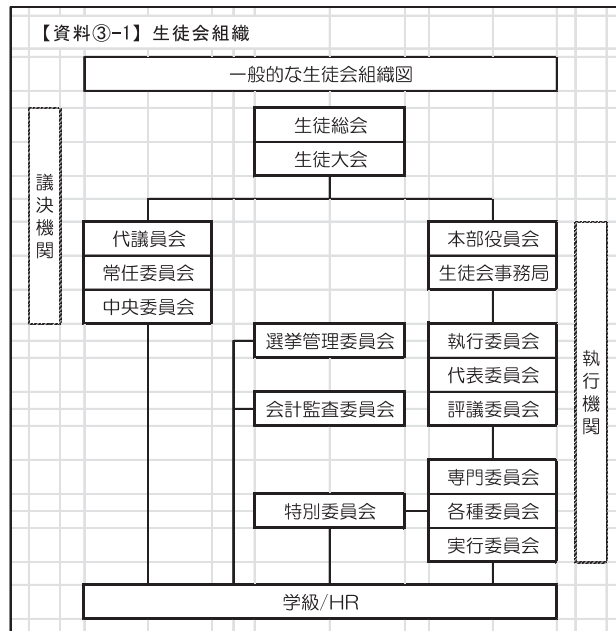
2 生徒会活動の支援の在り方

(1) 生徒会活動の指導において心掛けること

神奈川県立高等学校がホームページで公開している生徒会組織を集約すると、名称は様々ですが右図のようになります。図は、議決機関を左に、執行機関を右にまとめました。

① 議決機関

議決機関を指導する際に心掛けることは、組織の意思を決定する際、どのようにして民主的に合意を形成するかということです。安易に多数決を用いず、少数意見を取り



第3章 生徒会活動

入れて成案を作成する手立てを講じることが大切なのです。

特に、中学生には民主的な手続きを指導することが必要です。

まとめると次の2点になります。

- ・ 民主的な合意形成の実践
- ・ 少数意見の扱いを工夫

② 執行機関

執行機関は、生徒会の実践的活動を担う機関ですから、機関の意思決定に留まらず活動をどのように推進していくかに重点を置いて指導することが必要です。従って次の2点に要約できます。

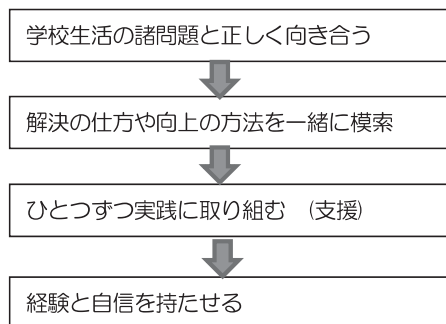
- ・ 継続的活動を行う
- ・ 組織の役割を明確化する。⇒「何を」「どのように」「行っていくか」

（2）生徒会活動の支援

生徒が自らの学校生活の改善と向上の問題を見つけ、その解決を試みる活動を支援するためには、無気力・無責任・無関心・無感動といわれる生徒の問題意識を掘り起こすことから始めなければなりません。その為には、具体的な解決策と一緒に模索し、実践して、経験と自信を持たせることが大切です。

その際特に注意することは、自治的活動とはいえ、どこまでも学校教育目標に副うものでなければならないということです。そのため、予め学校の態度を明確にしておくが必要になります。指導のステップを示すと【資料③-2】のようになります。

【資料③-2】生徒会指導のステップ



第3章 生徒会活動

【演習③-A】

あなたが勤務する学校に近隣の住民から、最寄駅からの通学路に関する次のような苦情が寄せられました。

- 1 生徒が歩道を横に広がって歩くため、駅に向かう住民が歩行困難になる。
- 2 雨の日やベビーカーを押しての交差では道を譲って貰えない。
- 3 信号の無い交差点では、集団登校の小学生が待たされている。

そこで、生徒会を動かしてこれらの問題を解決していくための指導企画書を作成しなさい。

課題	
1	① グループのメンバーがそれぞれ生徒会を動かす方法を考え発表する（一人3分）
5	② 発表に対するそれぞれの疑問を質問し合い、相互の理解を助ける。（5分）
10	③ 生徒会が中心になって解決するための企画をまとめ生徒会の具体的な指導計画をつくる。 二つの案を作成し、第一案を整理する。その際に期待できる効果についても整理する。（5分）
15	
20	④ 第二案を整理し、成案にする手立てを示して置く。（5分）

第3章 生徒会活動

【演習③-B】

中学校の生徒会主催で、学区内の小学校3校の6年生を学校に招いて「中学校生活体験」を行うことになりました。生徒会役員会として準備と当日の運営について、次の条件を踏まえて企画案を作成しなさい。個人の案をもとにグループ案を整理しなさい。

〔条件〕開催する中学校は各学年4学級

参加する小学校はA校2学級、B校が3学級、C校が1学級

個人	行事名								
	目標								
	開催日時								
	場所								
	係活動								
	活動内容								
グループ	行事名								
	目標								
	開催日時								
	場所								
	係活動								
	活動内容								

「中学校生活体験」相互評価		3段階評価		特に良い＝3点／普通＝2点／いまひとつ＝1点（自分の班は評価しない）					
評価項目	グループ	1班	2班	3班	4班	5班	6班	7班	8班
①	交流がうまく図られるのか								
②	中学生が主体的に運営できるか								
③	中学校生活の特徴が伝えられるか								
合 計 点									

第4章 学校行事

第4章 学校行事

【なにを学ぶのか】

ここでは、学校行事が学習指導要領にどのように記されているのかを確認し、学校行事の意味を理解しましょう。また、旅行・集団宿泊の行事に取り組むことを想定し、望ましい計画作成についても考えてみましょう。

- 1 学習指導要領に示された学校行事
- 2 儀式的行事とは
- 3 旅行・集団宿泊の行事で留意すべきこと

1 学習指導要領に示された学校行事

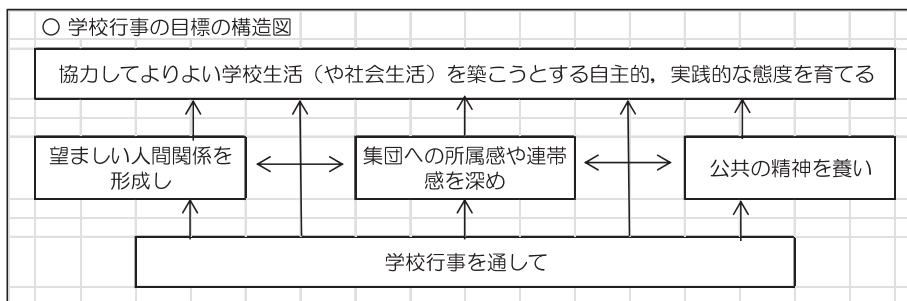
特別活動の内容である「学級・ホームルーム活動」「生徒会活動」「学校行事」のそれぞれに目標が記されたのは、小中学校が2008（平成20）年の改訂から、高等学校はその翌年の改訂からです。

1989（平成元）年の改訂では、各活動の前に活動内容が付されました。学校行事は下記のような活動内容の後に、体育的行事と保健・安全的行事がまとめられ、5つの行事が示されました。

学校行事においては、全校又は学年を単位として、学校生活に秩序と変化を与え、集団への所属感を深め、学校生活の充実と発展に資する体験的な活動を行うこと。

- (1) 儀式的行事
- (2) 学芸的行事
- (3) 健康安全・体育的行事
- (4) 旅行・集団宿泊の行事
- (5) 勤労生産・奉仕的行事

そして、1998（平成10）年の改訂ではそのまま、2008（平成20）年の改訂で目標と内容が分けて表示されました。次の目標の構造図を他の活動と比較してみましょう。



第4章 学校行事

【資料④-1】中学校学習指導要領に示された学校行事

※ () は下線部の高等学校の表記

[学校行事]

1 目標

学校行事を通して、望ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養い、協力してよりよい学校生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。

2 内容

全校又は学年を単位として(全校若しくは学年又はそれらに準ずる集団を単位として)、学校生活に秩序と変化を与え、学校生活の充実と発展に資する体験的な活動を行うこと。

(1) 儀式的行事

学校生活に有意義な変化や折り目を付け、厳粛で清新な気分を味わい、新しい生活の展開への動機付けとなるような活動を行うこと。

(2) 文化的行事

平素の学習活動の成果を発表し(総合的に生かし)、その向上の意欲を一層高めたり、文化や芸術に親しんだりするような活動を行うこと。

(3) 健康安全・体育的行事

心身の健全な発達や健康の保持増進などについての理解を深め、安全な行動や規律ある集団行動の体得、運動に親しむ態度の育成、責任感や連帯感の涵養、体力の向上などに資するような活動を行うこと。

(4) 旅行・集団宿泊的行事

平素と異なる生活環境にあつて、見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、集団生活の在り方や公衆道徳などについての望ましい体験を積むことができるような活動を行うこと。

(5) 勤労生産・奉仕的行事

勤労の尊さや創造することの喜びを体得し、職場体験などの職業や進路にかかわる啓発的な(職業観の形成や進路の選択決定に資する)体験が得られるようにするとともに、共に助け合って生きることの喜びを体得し、ボランティア活動などの社会奉仕の精神を養う体験が得られるような活動を行うこと。

2 儀式的行事とは

(1) 学校が行う儀式

学校が行う儀式は、一般的には学校や学期の始めと終わりに行われます。

- ・入学式 新しい学校生活に踏み出す佳節として、新入生やその家族が新しい学校への不安を解消させ、喜びと希望を持って出発できる配慮が大切。
- ・卒業式 中学校または高等学校の全課程の修了者に卒業証書を授与し、課程の修了を認める儀式である。教職員や保護者に感謝の気持ちを伝えることも次への出発の決意とともに行う配慮が必要。
- ・始業式 学期の始まりを告げる儀式。長期休業期間後に行うことが多いことから、学校生活に臨む新たな決意を促すことが大切になる。

第4章 学校行事

- ・終業式 学期の終了を告げる儀式。長期休業期間に向かうことが多いため、休業期間中の心構えなどを確認することが大切になる。
- ・修了式 各学年（3年生を除く）の最終日に学年の修了を告げる儀式。1年間を振り返り反省を促すとともに、新しい学年を迎える心構えなどを確認する。
- ※その他の儀式的行事 開校式・開校記念式典(周年式典)

（２）儀式的行事の内容の取扱いについて

現行の学習指導要領には、特別活動の「指導計画の作成と内容の取扱い」に、「入学式や卒業式などにおける国旗及び国歌の取扱い」が下記のように示されています。

- 3 入学式や卒業式などにおいては、その意義を踏まえ、国旗を掲揚するとともに、国歌を斉唱するよう指導するものとする。

（３） 国旗・国歌

国旗・国歌は、1999（平成 11）年に「国旗及び国歌に関する法律」が制定されて「日の丸」と「君が代」が国旗・国歌として法的に確定しました。学習指導要領には、次のように記載されてきました。

- ・1958（昭和 33）年・1969（昭和 44）年学習指導要領
 - …国民の祝日に儀式などを行なう場合には、生徒に対してこれらの祝日などの意義を理解させるとともに、国旗を掲揚し、「君が代」を斉唱させることが望ましい。
- ・1977（昭和 52）年 学習指導要領
 - …「国旗掲揚・国歌斉唱」を「させることが望ましい」
 - ※「日の丸」を「国旗」、「君が代」を「国歌」と明記
- ・1989（平成 1）年 学習指導要領
 - …入学式や卒業式などにおいては、その意義を踏まえ、国旗を掲揚するとともに、国歌を斉唱するよう指導するものとする。
 - ※入学式、卒業式における取り扱いについては、平成 2 年度から適用
- ・1999（平成 11）年 学習指導要領
 - …入学式や卒業式などにおいては、その意義を踏まえ、国旗を掲揚するとともに、国歌を斉唱するよう指導するものとする。

【資料④-2】

○ 国旗及び国歌に関する法律（平成 11 年 8 月 13 日法律第 127 号）

- 第1条（国旗） 国旗は、日章旗とする。
- 2 日章旗の制式は、別記第一のとおりとする。
- 第2条（国歌） 国歌は、君が代とする。
- 2 君が代の歌詞及び楽曲は、別記第二のとおりとする。

第4章 学校行事

附 則

(施行期日)

- 1 この法律は、公布の日から施行する。

(商船規則の廃止)

- 2 商船規則（明治3年太政官布告第57号）は、廃止する。

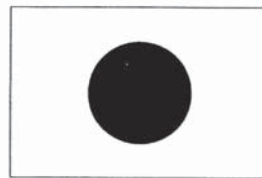
(日章旗の制式の特例)

- 3 日章旗の制式については、当分の間、別記第一の規定にかかわらず、寸法の割合について縦を横の十分の七とし、かつ、日章の中心の位置について旗の中心から旗竿側に横の長さの百分の一偏した位置とすることができる。

別記第1

(第1条関係) 日章旗の制式

- 1 寸法の割合及び日章の位置 縦横の3分の2
- 2 彩色 地 白色 日章 紅色



日章旗の制式

別記第2

(第2条関係) 君が代の歌詞及び楽曲

- 1 歌詞 君が代は 千代に八千代に さざれ石の いわおとなりて こけのむすまで
- 2 楽曲



3 旅行・集団宿泊的行事で留意すべきこと

この行事の実施にあたっては、学校種の区別なく、教科や道徳、総合的な学習の時間との関連を図り、事前および事後の指導を十分に行うことが大切です。そこで、「実務上」「安全上」「計画作成上」に分けて留意すべきことを紹介します。

(1) 実務上の留意点

学校教育の一環として行う行事ですから、計画から実施まで細部にわたって学校が主体性を持つことが大切です。したがって、旅行業者に任せっきりにしてはいけません。

次の点に留意して計画を進めます。

第4章 学校行事

- ア 物見遊山や観光旅行に終わらせないため、その教育的意義をふまえて創意工夫する。特に個人が目的を持って参加できるよう配慮することが大切。
- イ 計画の作成にあたっては生徒の自主的活動の場を取り入れる。
- ウ 予め実地踏査を行い、現地の状況や所要時間を把握し無理のない日程を作成する。
- エ 出発前から生徒の健康観察を行い個々の健康状態を把握しておく。必要に応じて健康相談を行う。

(2) 安全上の留意点

安全対策に「しすぎる」ことはありません。生徒の行動に合わせてあらゆる可能性を想定し、事故防止に万全を期することが大切です。そのためにも次のことに留意しなければなりません。

- ア 利用する交通手段や宿泊施設に応じその利用方法や緊急時の避難方法を周知する。
- イ 気象情報に注意し天候により臨機応変な措置が講じられるよう事前に予備の計画を設けておく。更に予定の変更を生徒に周知できる体制づくりも必要。
- ウ 目的地の宿泊施設や食事提供施設の衛生状態については保健所と、宿泊施設の防火や避難の対策については消防署と連絡をとり、協力を求める。
- エ 目的地の病院に協力を求め、夜間診療体制にもついても事前に堪忍しておく。
- ウ 必ず事前に実地踏査（下見調査）を行い、安全対策を講ずる。
- オ 実施中の緊急連絡体制および支援体制を事前に整備しておく。

(3) 計画作成上の留意点

① 学習指導要領に示された目標から内容を

計画は学習指導要領に示された旅行・集団宿泊的行事の目標を踏まえた内容とすることが大切です。そして、「平素と異なる生活環境」になぜ出かけるのか、そこでどんな体験活動ができるのか、体験活動を通して気付いたことを振り返ったり、まとめたり、発表し合うには適切な活動だろうか、ということ踏まえる必要があります。目標の「平素と異なる生活環境にあつて、見分を広め、自然や文化などに親しむとともに、集団生活の在り方や公衆道徳などについての望ましい体験を積むことができるような活動を行うこと。」から次の三つの活動に分けられます。

- ア 見分を広める望ましい体験
- イ 自然や文化などに親しむ望ましい体験
- ウ 集団生活の在り方や公衆道徳についての望ましい体験

② 体験活動は三つのプログラムで

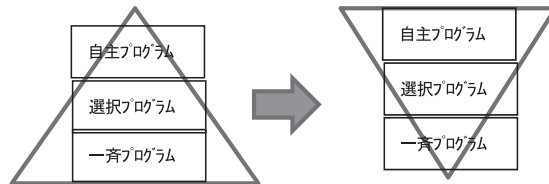
プログラムは次の三つを組み合わせ、生徒の発達段階に応じて、一斉プログラムより自主プログラムの割合を増やすことが望ましいと考えられます。そうすることで、特別活動が目標に掲げる次の内容を満たす活動になるのです。

- ア 望ましい人間関係を形成
- イ 集団への所属感や連帯感を深め
- ウ 公共の精神を養い
- エ よりよい学校生活（や社会生活）を築こうとする自主的、実践的態度

第4章 学校行事

- ・一斉プログラム …全員が一斉に同じ体験をする活動
- ・選択プログラム …個人の意思で体験が選択できる活動
- ・自主プログラム …自らで計画を組み上げて体験する活動

【資料④-3】三つのプログラム



③ マトリックス図を作成してから行程を

「目標の内容」と「三つのプログラム」のマトリックス図に、体験活動の場所と内容を記入してから、もう一度その行事のねらいに沿うのかを検証することが必要です。そして、それを行程表に作り変えていく作業をしていく際には、移動時間や方法、昼食や休憩施設にも、配慮する必要がある、同じような体験がもっと別の場所でも行えることに気付いたりもします。もちろん宿泊施設の検討は不可欠です。

目標の内容	一斉プログラム	選択プログラム	自主プログラム
見聞を広める望ましい体験			
自然や文化に親しむ望ましい体験			
集団のきまりや公衆道徳についての望ましい体験			

第4章 学校行事

【演習④-A】

高校生を対象とした旅行・宿泊的行事を企画してみましょう。

時期は1年生の期間中に3泊4日、費用は生徒一人10万円以内、とした研修計画を次の計画書（フォーム）に従って作成してみましょう。

旅行・宿泊的行事計画書																		
テ ー マ																		
テーマ設定の理由																		
主な目的地																		
		施設の名称				入場料・見学科		施設の名称				入場料・見学科						
主な見学科	第1日目																	
	第2日目					見学科						見学科						
	第3日目																	
	第4日目																	
マトリックス図																		
目標の内容		一斉プログラム				選択プログラム				自主プログラム								
見聞を広める望ましい体験																		
自然や文化に親しむ望ましい体験																		
集団のきまりや公衆道徳についての望ましい体験																		
行程表		6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
第1日目																		
月 日																		
経 費																		
第2日目																		
月 日																		
経 費																		
第3日目																		
月 日																		
経 費																		
第4日目																		
月 日																		
経 費																		
※経費凡例		[] 交通費 () 飲食費 { } 見学科																

第4章 学校行事

【演習④-B】

高校生の時の文化的行事を振り返り，特別活動論を学んだ今なら，当時の自分にどのような「助言」をしますか。また，その「助言」の期待される効果も考えてみましょう。

次の記録用紙に記された手順でグループワークをし，結果を発表してみましょう。

課題	
1	① グループのメンバーがそれぞれ振り返りを行う（一人3分）
5	② ①の振り返りから、グループで取り上げる活動をひとつ選ぶ(3分)
10	③ 取り上げた活動を自分が行ったのものとして、今だからできる「助言」を考えて発表する。
	その際に期待できる効果についても述べる(一人3分)
15	
	④ メンバーの発表からより効果的な助言を選択する(5分)
20	
25	

第5章 ボランティア活動

第5章 ボランティア活動

【なにを学ぶのか】

ここでは、特別活動におけるボランティア活動について学びます。

現行の学習指導要領は、生徒の体験的な学習活動、特にボランティア活動や自然体験活動の充実に努めることを求めています。特別活動では、学級・ホームルーム活動、生徒会活動、学校行事のいずれの内容にもボランティア活動が示されています。

そこで、次の5つの項目から特別活動におけるボランティア活動の理解に努めましょう。

- 1 学校におけるボランティア教育
- 2 学習指導要領に示されたボランティア活動
- 3 中学校におけるボランティア活動
- 4 高等学校におけるボランティア活動（体験談）

（資料）中学校1年生への指導案

1 学校におけるボランティア教育

学校教育においては、豊かな心をもち、たくましく生きる人間の育成を図ることが重要であり、そのためには、他人を思いやる心や感謝の心、公共のために尽くす心を育てることなどに配慮する必要があります。また、生活体験が希薄化している児童生徒が、体験を通して勤労の尊さや社会に奉仕する精神を養うことは極めて重要です。このような観点から、2001(平成13)年7月、学校教育法等の改正が行われ、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、さらに盲学校、聾学校及び養護学校(2007年4月からは特別支援学校)において、教育目標の達成に資するよう、教育指導を行うに当たり、児童生徒の体験的な学習活動、特にボランティア活動など社会奉仕体験活動、自然体験活動その他の体験活動の充実に努めるものとするのが規定されました。また、学校内外における社会的活動を促進し、公共の精神に基づき主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うことが義務教育の目標として規定されたことから、学校教育においてボランティア活動を含む社会奉仕体験活動の推進を図っていく必要があるのです。

高等学校及び特別支援学校高等部では、ボランティア活動など学校外での多様な活動を、校長の判断により卒業に必要な単位に36単位を上限として認定することが可能となっています。

○ボランティア活動等に係る学修の単位認定

（学校教育法施行規則第98条第3号、平成10年文部省告示第41号）

校長は、生徒のボランティア活動等に係る学修を高等学校における科目の履修とみなし、単位を与えることができます。具体的には、(1)ボランティア活動、(2)就業体験(インターンシップ)、(3)スポーツ又は文化に関する分野における活動で顕著な成果をあげたものに係る学修ですが、高等学校の単位として認定する以上、当然、高等学校教育に相当する水準を有すると校長が認めたものに限られます。

第5章 ボランティア活動

2 学習指導要領に示されたボランティア活動

(1) 特別活動におけるボランティア活動

ボランティア活動は、特別活動の全内容に示されています。中学校と高等学校を比較すると学級活動が「理解と参加」、ホームルーム活動は「理解と参画」、生徒会活動では中学校が「社会参加」、高等学校が「社会参画」と表記されています。「参加」と「参画」の違いに着目して理解しましょう。

		中学校	高等学校
学級(ホームルーム)活動	適応と成長及び健康安全	ボランティア活動の意義の <u>理解と参加</u>	ボランティア活動の意義の <u>理解と参画</u>
生徒会活動		ボランティア活動などの <u>社会参加</u>	ボランティア活動などの <u>社会参画</u>
学校行事	勤労生産・奉仕的行事	勤労の尊さや創造することの喜びを体得し、職場体験などの職業や進路にかかわる啓発的な体験が得られるようにするとともに、共に助け合って生きることの喜びを体得し、 <u>ボランティア活動などの社会奉仕の精神を養う体験が得られるような活動を行うこと。</u>	勤労の尊さや創造することの喜びを体得し、就業体験などの職業観の形成や進路の選択決定などに資する体験が得られるようにするとともに、共に助け合って生きることの喜びを体得し、 <u>ボランティア活動などの社会奉仕の精神を養う体験が得られるような活動を行うこと。</u>

高等学校では、ボランティア活動に参加するだけでなく、計画の段階から主体的に取り組むことを期待しているのです。『高等学校学習指導要領解説 特別活動編』では、「学校行事におけるボランティア活動は、生徒がボランティア活動について学んだり、体験したりして、ボランティア精神を養い、自己の在り方生き方（中学校は「生き方」）を見つめ、将来社会人としてボランティア活動に積極的に参加していく意欲や態度を養うことに意義があり、ボランティア教育（ボランティア学習）を含めた教育活動として広くとらえられるものである。その際、ホームルーム活動（中学校は「学級活動」）や生徒会活動として行うボランティア活動との関連を図ることや、生徒の自主性・主体性が発揮されるように工夫することが必要である。」と説明しています。

(2) ボランティア活動の意義

『高等学校学習指導要領解説 特別活動編』では、ホームルーム活動（中学校は「学級活動」）の内容の解説で、ボランティア活動について次のように示しています。

「ボランティア活動は、個人の自由意思を基本とし、自分の技能や時間等を進んで提供し、他人や社会に貢献する活動とされ、他人を思いやる心、互いを認め合い共に生きていく態度、自他の生命や人権を尊重する精神などに支えられている。また、よりよい社会づくりに主体的かつ積極的に参加・参画していく手段として期待されている。」と。続けて「したがって、生徒が自らも社会の一員であることと社会における自分の役割を自覚し、互いが支え合う社会の仕組みを実感する上で重要な意味をもつとともに、他の人々や社会のために役立つ体験をしながら、そのことを通して自尊感情を高め、自己実現を図り、自他が共に価値ある大切な存在であることを実感し豊かな心情を培うことができる活動である。」と説明しています。（下線部は中学校の解説にはない）

第5章 ボランティア活動

3 中学校におけるボランティア活動

(1) 社会の一員としての自覚

ボランティア活動は、中学校の特別活動において、全ての活動に登場する必須内容となっています。ボランティア活動を通し、社会貢献への自発的、自治的な取り組みによって社会奉仕の精神を養うだけでなく、社会の一員であるといった自覚と役割意識を培います。

(2) 特別活動の中のボランティア活動

中学校では、「職場体験」や「自然体験」といった体験活動の充実を図っています。その一環として、学級活動、生徒会活動、学校行事といった特別活動の時間にボランティア活動が行なわれています。次にそれぞれの活動を紹介します。

① 学級活動におけるボランティア活動

学級を単位とする学校生活の充実と向上を目指す活動において、「ボランティア活動の意義の理解と参加」が掲げられています。具体的な活動として、下級生への学習支援、身近な助け合い活動など、校内でできる活動や、学級でできる活動を企画実行し参加することが挙げられます。「考えられる効果」は以下の通りです。

- ア 社会的課題に触れることで社会の現状を学び、養われる社会性
- イ 他者との関わりを通して高められるコミュニケーション能力
- ウ 自己肯定感や自発性

② 生徒会活動におけるボランティア活動

全生徒で組織する生徒会において、学校生活の充実と向上を目指す活動では、「社会参加」の意味合いを強く持つボランティア活動が考えられます。具体的には、学校内で行なわれるボランティア活動と、地域の活動に参加する学校外のボランティア活動があります。

- ア 生徒会の呼びかけによるボランティア活動
- イ 地域の福祉施設や社会教育施設等での活動
- ウ 地域の社会的活動（防災や交通安全、文化・スポーツ行事など）

幼児から高齢者まで幅広い世代との交流や障害のある人々との触れ合いを通し、社会の一員としての役割意識を育みます。

③ 学校行事におけるボランティア活動

学校行事には、「勤労の尊さや創造することの喜びを体得し、職場体験などの職業や進路にかかわる啓発的な体験が得られるようにするとともに、共に助け合って生きることの喜びを体得し、ボランティア活動などの社会奉仕の精神を養う体験が得られるような活動を行うこと。」を内容とする「勤労生産・奉仕的行事」があり、ボランティア活動も含まれています。

学校行事におけるボランティア活動は、学級活動や生徒会活動との関連性を図りながら、共に助け合って生きる人間として必要な社会奉仕の精神を養います。家庭との連携や協力のもと、幅広い社会貢献、社会参加の活動において、地域の人々と交流できる機会としても重視されています。

第5章 ボランティア活動

4 高校生のボランティア活動（体験談）

ボランティアにはさまざまな活動があり、その活動体験を次に紹介します。これからボランティアを始めようと考えている人は参考にしてください。

① デイサービス施設でのボランティア

デイサービス施設でのボランティアの際、最も気をつけなくてはならないのが“お客さんにならないこと”“必ずメモをとって行動すること”です。デイサービス施設には決まった時間割が存在し、その時間軸のなかで利用者や職員が活動しています。

② 車椅子バスケットでのボランティア

はじめに述べておきたいのが、バスケットボールはある程度運動に自信の有る人でも、そのスピードについていだけで難しいスポーツだということです。ただし、スポーツ特にバスケットボールが好きな人にとっては、楽しい刺激的なボランティア経験になるのではないかと思います。

③ 本の読み聞かせボランティア

本の読み聞かせボランティアで最も重要なのは、同じお話に対しても年代層によって読み方や話の展開を変えていく力をもつことです。本に引きつける努力、小さな子ども達に読んで聞かせるときには、登場人物ごとに声色を変えたり本に引きつける努力をする必要が有ります。

④ 手話を用いたボランティア

皆さんは、手話を使ったことや手話を用いている人に出会ったことはありますか？手話は、私たちが普段話している言語となんら変わりなくただ音がないだけの言語です。手話を用いて生活している人にはどこで会おうか分かりません。

⑤ 日常での車椅子使用者ボランティア

日頃から車椅子を使っている人を介助するというのは、なかなか難易度の高いボランティア活動になります。しかし、このボランティア活動の中には他のボランティアにも重要な役立つ知識が多々散りばめられています。

【資料⑤-1】横浜市教育委員会では「学校・地域コーディネーター」を養成

横浜市教育委員会では、文部科学省の「学校・家庭・地域の連携による教育支援活動促進事業」を受け、社会全体で様々な教育支援活動を実施し地域の教育力の向上を図るため、学校と、企業やNPO、地域住民等とのパイプ役となる、「学校・地域コーディネーター」を養成しています。

Yokohama 学校地域コーディネーター・フォーラム実行委員会は、日常的な情報交換の場である「横浜 学校・地域コーディネーター連絡会」の有志が中心となり企画・運営しています。

環境、福祉、国際交流、科学実験や、これからの学校教育に欠かすことのできないキャリア教育、そして地域における学校外の多彩な支援活動などを行っています

第5章 ボランティア活動

【資料⑤-2】中学校第1学年〇組 「学級活動」指導案（例）

1 題材 「ボランティアから生まれる新しい自分」

内容（2）カ ボランティア活動の意義の理解と参加

2 題材について

(1) 生徒の実態

本学級の生徒は、明るく素直な生徒が多い。親和的でまとまりのある集団で、学校生活を楽しく過ごしていると感じる生徒がほとんどである。しかし、友人を傷つけるような発言をしたり、困っている友人を見て見ぬふりをしたりする生徒が数名いる。集団の一員としての自覚や思いやりに立った自他の理解が必要である。

話し合いの場では、活発に発言をする生徒も多いが、自分の考えを全体の前で述べるのが苦手な生徒や自分から意見を述べることに消極的な生徒もいる。話し合い活動では、話し合いの進め方を身につけさせるとともに、お互いの意見を尊重し、しっかりと聞き合う態度を身につけさせることで、活発に意見交換が行われるよう工夫したい。

(2) 題材設定の理由

近年、ボランティア活動への参加への意識が高まってきている。先の震災に関する報道の中でも数多くのボランティアが活動する様子が日常的に伝えられている。ボランティア活動は、個人の自由意志を基本とし、自分の技能や時間等を進んで提供し他人や社会に貢献する活動であり、中学生にとって、自らの意思で社会や他者のために奉仕するボランティア活動に参加することは、意義深いものである。社会的役割の自覚、思いやりをもって相手を理解するなど、人間的な成長を遂げながら社会的な自立へ向けての基盤を育むことになる。

そこで、本題材ではボランティア活動の意義について理解し、今の自分に「何ができるのか」を問いかけることで、主体的にボランティア活動に参加できるよう、意識をもたせたい。

3 指導のねらい

事例等を通し、ボランティア活動の意義や活動内容等について考えさせる。また、話し合いを通して、周りの人をちょっと幸せにするために自分ができることを考えさせ、ボランティア活動に参加する意欲をもたせる。

4 学級活動（2）の評価規準

集団活動や生活への 関心・意欲・態度	集団や社会の一員としての 思考・判断・実践	集団活動や生活についての 知識・理解
ボランティア活動の意義を理解することによってボランティア精神の涵養を図り、自発的な参加への意欲を高めようとしている。	ボランティア活動の意義について理解を進め、学校内や地域で可能なボランティア活動体験を企画し、実践している。	学級活動や生徒会活動での体験や学習を機に、ボランティア活動の基本的な考え方について理解している。

第5章 ボランティア活動

5 指導の過程

(1) 事前の指導と生徒の活動

日 時	活動の内容	指導上の留意点	目指す生徒の姿と評価の方法
9 月 20 日	<ul style="list-style-type: none"> ペア活動で次の4つのテーマについて互いの考えを聞き合う。 	<ul style="list-style-type: none"> オープクエスションのポイントを確認する。 	<p>【関心・意欲・態度】</p> <ul style="list-style-type: none"> 相手とコミュニケーションをとろうとしている。 <p>〔観察〕</p> <ul style="list-style-type: none"> オープクエスションによる聞き方を実践し、相手の発言をきちんと記録している。 <p>〔話したことカード、観察〕</p>
	<p>① ボランティアって聞いて、あなたが思い浮かべることは？</p> <p>② 学校や社会で行われているボランティアには、どんなものがあるだろう？</p> <p>③ 中学生がボランティア活動に取り組もうとすることには、どんなよさがあるだろう？</p> <p>④ みんなを今よりもちょっとだけ幸せにするために、あなたはどんなボランティアをしたらいと思う？</p>		
	<ul style="list-style-type: none"> 題材に対する自分の意見を学級会ノートに記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> 聞いたこと記録用紙を振り返らせながら、学級会ノートに意見を書かせる。 	<p>【関心・意欲・態度】</p> <ul style="list-style-type: none"> 題材に関心をもち、自主的に自己の考えをまとめようとしている。 <p>〔学級会ノート〕</p>
9 月 26 日	<p>◇計画委員会</p> <ul style="list-style-type: none"> ペア活動で出た意見を基に実態を分析し、話合いの流れを把握する。 提案理由を検討するとともに、本時の活動計画を作成する。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の意見を踏まえ、本時の流れなどを検討し、活動に見通しをもたせる。 	<p>【関心・意欲・態度】</p> <ul style="list-style-type: none"> 話合い活動が充実するように、自主的、自律的に準備を進めようとしている。 <p>〔観察〕</p>

(2) 本時の指導と生徒の活動

ア 本時の題材 「ボランティアから生まれる新しい自分」

イ 生徒の活動計画 ※学級会ノート

ウ 本時のねらい

- ボランティア活動の意義や、活動内容等について考えさせる。
- 話合い活動を通して、自分ができていることを考えさせ、主体的にボランティア活動に参加する意欲を高めさせる。

第5章 ボランティア活動

エ 教師の指導計画

	活動の内容	指導上の留意点	資料等	目指す生徒の姿と 評価の方法
活動の開始 6分	1 はじめの言葉 2 司会団の紹介 3 題材と提案理由、話合いのめあての確かめ	<ul style="list-style-type: none"> ・計画委員会での検討の経緯について説明するよう助言する。 ・題材の価値や提案理由に関する補足をしながら、学級の連帯感が深まるような話合いになるよう助言する。 	学級会 ノート	
活動の展開 30分	4 話合い (1) 柱1前の教師の話 柱1「学校や社会で行われているボランティアには、どんなものがあるだろう。」 (2) 柱2前の教師の話 柱2「中学生がボランティア活動に取り組もうとすることには、どんなよさがあるだろう。」 (3) 柱3前の教師の話 柱3「みんなを今よりもちょっとだけ幸せにするために、あなたはどんなボランティア活動をしたらよいと思いますか。」	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア活動の例を紹介し、これまでのボランティア活動の経験等を踏まえ、自分が感じた意見を率直に発言するように促す。 ・ボランティア活動とは自発性、無償性、利他性に基づく活動であることをおさえる。 ・オープンクエスチョンによる聞き方などを取り入れ意見の交流が活発に行われるよう助言する。 ・朝掃除をしている生徒会活動の様子や体験談を紹介する。 ・柱1、2で発表された意見を振り返りながら、実践への意欲を高める。 ・自分たちもできる身近なボランティア活動が多くあることを理解させる。 	学級会 ノート	【思考・判断・実践】 ・それぞれの柱に適した自分の意見を考え、発表している。 〔観察・学級会ノート〕
活動のまとめ 14分	5 話合ったことの確認 6 話合いの気付き・自分のめあて 7 自分の意見を上手にまとめられたで賞の発表 8 教師の話 9 終わりの言葉	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の話合い活動を通して気付いたことや考えたことなど、学級会ノートに記入するよう助言する。 ・話合いの雰囲気盛り上げた発言や司会団の活動などを称賛するとともに、実践に向けての意欲を高める。 	学級会 ノート めあて カード 表彰メダル	【思考・判断・実践】 ・話合いの流れを踏まえ、自分にあった具体的なめあてを立てている。 〔めあて、学級会ノート〕

第5章 ボランティア活動

(3) 事後の指導と生徒の活動

日 時	活動の内容	指導上の留意点	目指す生徒の姿と評価の方法
10月1日 ～ 10月7日	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合い活動における自分のめあてに基づいて活動する。 ・振り返り活動 	<ul style="list-style-type: none"> ・前日の帰りの会で、自分のめあてについて確認させ、めあてを実践する場面を想起させる。 ・帰りの会で、振り返りシートにめあての達成度と活動の振り返りを記入させる。 	<p>【関心・意欲・態度】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・振り返りノートに自分の実践に対する振り返りを記述している。 <p>〔観察、振り返りノート〕</p> <p>【思考・判断・実践】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・振り返りを通して、めあてに対する自分の課題や向上した点について記述している。 <p>〔振り返りノート〕</p>

（「佐賀県教育センター」ホームページ掲載中学校教育特別活動 より作成）

【演習⑤-A】

「ボランティア活動」の実践に向けて

- 1 自分が中学校（高等学校）教員になったときに、どのような方法で生徒にボランティア活動を勧めて行くかを考える。
- 2 地域・学校コーディネーターの必要性和関わりも考え、グループ内で話し合う。
- 3 グループで共有化し、まとめて発表し、質疑を受け、その後個人で感想をまとめる。

第5章 ボランティア活動

【演習⑤-B】

中学校2年生の学級委員会で、全クラス（5学級）が参加をして校内や地域でボランティア活動をやすることに決まりました。下のフォームを使って各学級で提案するために、学級委員会で企画（案）を作成しなさい。

個人	行事名								
	目標								
	開催日時								
	活動場所								
	活動内容								
グループ	行事名								
	目標								
	開催日時								
	活動場所								
	活動内容								
「学級委員会企画」相互評価		3段階評価	特に良い＝3点／普通＝2点／いまひとつ＝1点（自分の班は評価しない）						
評価項目	グループ	1班	2班	3班	4班	5班	6班	7班	8班
①	学校や地域にとって必要な活動か								
②	中学生の社会性を育む活動か								
③	中学生が積極的に参加できる活動か								
合 計 点									

第6章 特別活動において配慮すべきこと

第6章 特別活動において配慮すべきこと

【なにを学ぶのか】

ここでは、特別活動の特徴を再確認するとともに、特別活動と他領域との関係と特別活動の評価について学びます。

- 1 特別活動の特徴
- 2 特別活動と他の領域・指導との関係
- 3 地域との連携，社会教育施設の活用
- 4 特別活動の評価

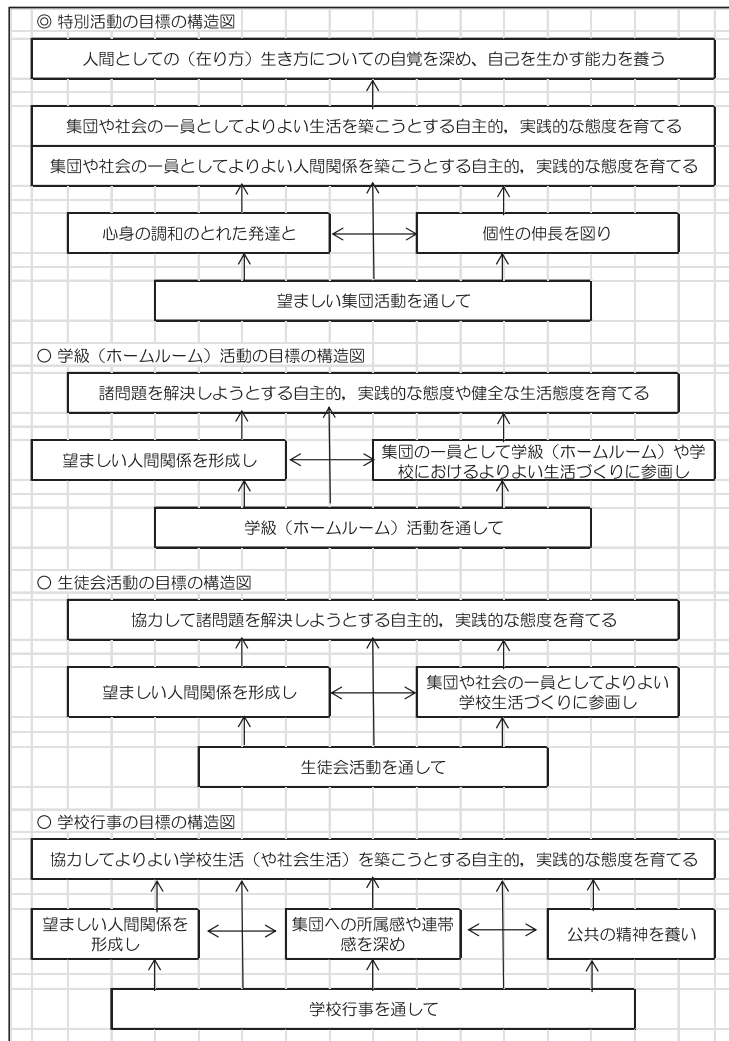
1 特別活動の特徴

特別活動の目標を構造図にして比較すると右図のようになります。

それぞれの活動の特徴は、学校行事が、全校、学年、学科の規模で行われ、生徒会活動は「異年齢集団」での活動に特徴があります。

学級（ホームルーム）活動は、比較的少人数で行われる活動です。

いずれも「望ましい人間関係」と「自主的、実践的態度」を育てることを目標に含んでいます。そして、「人間としての在り方生き方」についての自覚を深める活動が「特別活動」なのです。



第6章 特別活動において配慮すべきこと

2 特別活動と他の領域・指導との関係

(1) 特別活動と総合的な学習の時間との関係

現行の学習指導要領には、「総則」に次のように示されています。

総合的な学習の時間における学習活動により、特別活動の学校行事に掲げる各行事の実施と同様の成果が期待できる場合においては、総合的な学習の時間における学習活動をもって相当する特別活動の学校行事に掲げる各行事の実施に替えることができる。

特別活動は、「集団の一員としての自覚」や「自主性」を育てることをねらいとしており、総合的な学習の時間は、探究的な学習を行い「問題を解決する力」を育てることをねらいとしています。そこで、一つの行事を、活動内容やねらいによってどちらかの時間に位置づけることができます。たとえば、修学旅行で決まりや約束ごとを守ることの大切さや行動班や係り分担などを決めたりする場合は「特別活動」の位置づけとなり、班毎で見学場所について調べたり、交通機関や地理を調べ行動計画を立てる場合は「総合的な学習の時間」の位置づけとすることができます。

(2) 特別活動と生徒指導との関係

中学校および高等学校の『学習指導要領解説 特別活動編』では、「指導計画の作成と内容の取扱い」に「生徒指導の機能を十分に生かす」と題し、次のように記されています。

(2) 生徒指導の機能を十分に生かすとともに、教育相談(進路相談を含む。)についても、生徒の家庭との連絡を密にし、適切に実施できるようにすること。

続けて、次のように解説していますので、生徒指導との関係を把握しましょう。

「生徒指導は、学習指導要領第1章総則の第5款の5の(3)に示されているように、『教師と生徒の信頼関係及び生徒相互の好ましい人間関係を育てるとともに生徒理解を深め、生徒が主体的に判断、行動し積極的に自己を生かしていくことができるよう』に指導・援助を行うものである。その機能が有効に働くためには、共感的な人間関係を育成し、生徒に確かな存在感を与えるとともに、自己決定の場や機会をより多く用意し、生徒が自己実現の喜びを味わうことができるよう、指導上の配慮を行うことが大切である。

特別活動は、その目標や内容、指導の形態や方法において生徒指導と深くかかわるものがあり、上に述べたような生徒指導の機能を指導計画の作成に十分に生かすことにより指導の効果があがるものといえる。

また、特別活動の指導は、主に集団場面において生徒の集団活動の指導・援助を通じて行われることから、生徒指導も集団場面における指導が基本となる。そして、特別活動の指導も生徒指導も、究極的には生徒一人一人の望ましい人格形成を図ることをねらいとしているので、学んだ内容を生徒一人一人が身に付けるためには、集団場面に続いてあるいは並行して、個別場面における指導がぜひとも必要である。」

第6章 特別活動において配慮すべきこと

3 地域との連携、社会教育施設等の活用

中学校および高等学校の『学習指導要領解説 特別活動編』では、「指導計画の作成と内容の取扱い」に地域との人々との連携と社会教育施設の活用について、次のように示しています。家庭や地域との連携の大切さも理解しておきましょう。

「特別活動は、家庭や地域等との連携・協力が重要な意味をもつ教育活動であり、そうした幅広い教育力を活用した学校内外での体験活動は、生徒の調和のとれた人間形成を図るとともに人間としての生き方についての自覚を深める上で、極めて重要である。そのため、各学校が、家庭や地域との連携や交流を深め、その教育力の活用を図ったり、地域の自然や文化・伝統を生かしたり、社会教育施設等を活用した教育活動を展開していくことが必要であり、特別活動の指導計画の作成に当たっては、地域や学校の特色を生かした指導計画の作成に配慮することが大切である。」

4 特別活動の評価

（1）学習指導要領の表記

現行の学習指導要領の総則では、高等学校が「教育課程の実施等に当たって配慮すべき事項」に、小学校および中学校は「指導計画の作成に当たって配慮すべき事項」に次のように記されています。

生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価するとともに、指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行い学習意欲の向上に生かすようにすること。
※小学校は「生徒」を「児童」と表記している

『学習指導要領解説 特別活動編』では、これを特別活動の「評価」の根拠とすることが示されています。よく読んでしっかり理解しましょう。

「特別活動の評価において、最も大切なことは、生徒一人一人のよさや可能性を積極的に認めるようにするとともに、自ら学び自ら考える力や、自らを律しつつ他人とともに協調できる豊かな人間性や社会性など「生きる力」を育成するという視点から評価を進めていくということである。そのためには、生徒が自己の活動を振り返り、新たな目標や課題をもてるような評価を進めるため、活動の結果だけでなく活動の過程における生徒の努力や意欲などを積極的に認めたり、生徒のよさを多面的・総合的に評価したりすることが大切である。その際、集団活動や自らの実践のよさを知り、自信を深め、課題を見出し、それらを自らの実践の向上に生かすなど、生徒の活動意欲を喚起する評価にするよう、生徒自身の自己評価や集団の成員相互による評価などの方法について、一層工夫することが求められる。

また、評価については、指導の改善に生かすという視点を重視することが重要である。評価を通じて教師が指導の過程や方法について反省し、より効果的な指導が行えるような工夫や改善を図っていくことが大切である。その際、集団活動を特質とする特別活動においては、生徒一人一人の評価のみならず、集団の発達や変容についての評価も重要であり、この評価の結果を適切に指導に生かすことが重要である。」

第7章 部活動

第7章 部活動

【なにを学ぶのか】

部活動は、教育課程外の実践活動として行われています。したがって特別活動の内容ではありません。しかし、その実態を知り顧問教員としての在り方を考えることは、教員を目指す者には欠かせません。そこで、次の2つの項目から考えてみましょう。

- 1 部活動の実態と意義
- 2 部活動が抱える問題点と解決への模索

1 部活動の実態と意義

(1) 部活動の教育的な意義

部活動については、さまざまな機関が調査を行って報告書を出しています。それらのものには次のようなことが意義として掲げられています。また、部活動に携わっている教員の多くが右の囲みに示したことを部活動の長所として認めています。

- ・個性、能力の伸長
- ・学習意欲の向上
- ・好ましい人間関係の形成
- ・責任感や連帯感の涵養
- ・心身の健全育成
- ・生涯学習の基礎づくり
- ・適正、興味、関心の追求
- ・所属意識や愛校心の涵養

- ・授業や学校行事では得られない貴重な経験ができる
- ・目的意識を持って学校生活を送ることができる
- ・仲間との共同生活を通して社会性や公共心を育むことができる
- ・自発的、自主的な活動を組織し展開することができる
- ・同じ目標に向かって取り組むことで、仲間や顧問教師とのふれあうことができる
- ・切磋琢磨することを通じて豊かな人間性を築くことができる

(2) 部活動の学校教育上の位置づけ

① 学習指導要領の部活動

学習指導要領に「部活動」という用語が登場するのは1989（平成元）年の改訂です。特別活動の内容のひとつであった「クラブ活動」の履修を、中学校および高等学校では「当該部活動への参加によりクラブ活動を履修した場合と同様の成果があると認められるときは、部活動への参加をもってクラブ活動の一部又は全部の履修に替えることができる」と「指導計画の作成と内容の取扱い」に示されました。

1998（平成10）年の改訂では、中学校および高等学校の特別活動の内容から「クラブ活動」が除かれ、「部活動」に関する表記も無くなりました。しかし、2008（平成20）年に改訂された現行の学習指導要領では、中学校および高等学校とも「総則」に次のように記載されました。

生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること。その際、地域や学校の実態に応じ、地域の人々の協力、社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携などの運営上の工夫を行うようにすること。

第7章 部活動

② 運動部活動の現況

文部科学省が1997（平成9）年12月に発表した『運動部活動の在り方に関する調査研究報告（中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力者会議）』によると、生徒の所属状況は、「調査対象の中学校・高等学校の全てで運動部が設けられ、中学校で73.9%、高等学校で49.0%の生徒が何らかの運動部に所属していた。1校当たりの運動部数と1部当たりの部員数は、中学校では約15部・約30人、高等学校では約24部・約20人であった。なお、自分の学校の運動部の活動状況について校長に聞いたところ、中学校で98.0%、高等学校で93.8%が、『活発である』と答えた。」と記されています。

なお、所属状況の集計結果は次のように示されています。

生徒の運動部等への所属状況	中学校			高等学校		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子
運動部に所属している者	73.9%	83.0%	64.1%	49.0%	56.3%	41.1%
地域のスポーツクラブに所属している者	7.7	10.2	5.0	4.2	5.7	2.6
文化部など運動部以外の部に所属している者	17.1	7.9	27.1	22.0	13.8	30.9
学校以外の文化的教室等に所属している者	7.0	3.9	10.4	3.1	1.4	5.0
どれにも所属していない者	7.8	7.6	8.2	27.3	28.1	26.2
			※複数回答可	(中学校100校、高等学校100校の生徒)		

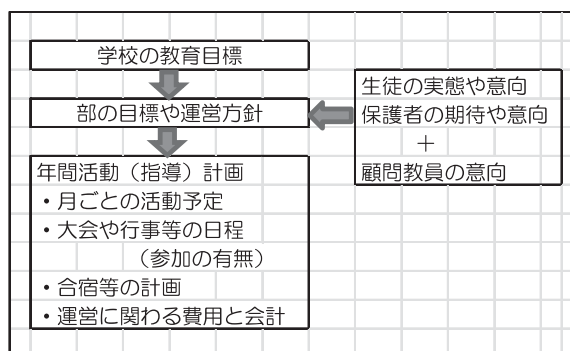
（3）部活動の顧問

① 計画的な指導

部活動は教育課程外の活動とはいえ、学校において計画する教育活動であり、学校の教育活動全体を通じて適切に行われるべきものですから、学校の教育目標のもと、年間を通じた計画的な指導が必要になります。

次の【資料⑦-1】は、その手順を示したものです。

【資料⑦-1】部活動の指導手順



第7章 部活動

② 顧問の役割（例）

部活動の顧問教員がどのような仕事を担っているのかを挙げると、次のようになります。

- ・年間、月間活動計画の作成
- ・緊急連絡網の作成
- ・部活動予算の編成と調整、運営費の管理
- ・部員の生活指導
- ・保護者との連絡、連携
- ・校外活動時の引率
- ・用具や施設の管理
- ・顧問会議への出席
- ・他校、中体連や高体連（高野連）、中文連や高文連への連絡
- ・養護教諭やコーチ、トレーナー、インストラクター等との連絡
- ・管理職への報告、連絡、相談

また、顧問教員の悩みを、先の文部科学省の報告書から多い順に列举すると次のようになります。数字の前が中学校、後が高等学校の調査結果です。

- ・校務が忙しくて思うように指導できない。(58.2%/55.1%)
- ・自分の専門的指導力の不足。(40.0%/35.3%)
- ・施設・設備等の不足。(28.1%/26.2%)
- ・自分の研究や自由な時間等の妨げになっている。(26.2%/20.4%)
- ・部員同士の人間関係。(12.5%/6.1%)
- ・競技志向の生徒と楽しみ志向の生徒の共存。(10.3%/9.3%)
- ・部員数が多い。(9.3%/3.9%)
- ・生徒の塾（習い事）との関連。(9.1%/4.2%)
- ・部員数が少ない。(8.7%/22.6%)
- ・部員のやる気が不足。(8.7%/9.4%)
- ・予算が不足。(8.1%/14.4%)

2 部活動が抱える問題点と解決への模索

（1）現象面から捉えた問題点

運動部の活動は、文部科学省が所管する「誰もがいつでもどこでもスポーツに親しむことができる生涯スポーツ社会を実現するための環境の整備」を進める「生涯スポーツ課」と、「スポーツには自らの能力と技術の限界に挑む活動であると同時に、その優れた成果は、国民に夢と感動を与える」ことからスポーツ振興を進める「競技スポーツ課」の末端組織になっています。したがって、中学校および高等学校の運動部の活動には、「生涯スポーツ」を目指す者と「競技スポーツ」を目指す者が混在して活動していることになります。生徒の欲求を受け止める顧問教員の混乱の原因はここにあります。

もうひとつ大きな問題があります。学校にスポーツトレーニングについて専門的に学んだ者が配置されているケースは極めて少ないのです。したがってスポーツ障害を生み出す危険も依然として残されているのです。

第7章 部活動

(2) 生徒が抱える問題点

『神奈川大学心理・研究論集第8号1990(平成2)年3月』で報告された「現代中学生の特色～自立・共生に関する意識調査の結果から」(金子保雄氏代表)には、部活動に参加している中学生63.1～87.9%で、部活動が「楽しい時間」と受け止めている者は、住宅地・商業地・工業地の地域より差はありましたが5.5～14.1%にとどまっていました。

しかし、前項で紹介した文部科学省が1997(平成9)年12月に発表した「運動部活動の在り方に関する調査研究報告」では、次のような結果が得られています。

運動部は楽しいか (校種・学年別)	中学校				高等学校			
	全体	1年生	2年生	3年生	全体	1年生	2年生	3年生
楽しい	83.4%	87.8%	82.5%	79.4%	83.8%	83.5%	82.9%	85.2%
とても楽しい	43.1	52.8	38.6	37.4	43.4	45.5	38.7	45.6
どちらかという楽しい	40.3	35.0	43.9	42.0	40.4	38.1	44.2	39.7
苦しい	16.6%	12.2%	17.5%	20.6%	16.2%	16.5%	17.2%	14.8%
とても苦しい	12.2	9.6	13.4	13.7	11.9	12.1	12.7	10.8
どちらかという苦しい	4.5	2.6	4.1	6.9	4.3	4.4	4.5	4.0
(中学校100校、高等学校100校の生徒)								

現代中学生の特色の調査が行われたのは昭和の終わりですが、わずか10年足らずで劇的な改善があったことが伺えます。しかし、運動部活動を指導する者は、中学校、高等学校とも16%を超える者が「苦しい」と回答していることを忘れてはなりません。

(3) 顧問教員が抱える問題点

かつて運動部の顧問には、教員採用時に、本人の希望や経験とは無関係に、若さのみを理由に要請された者も多く存在していました。つまり、専門的知識や技能が不足する顧問教員が多く存在していたのです。その専門的知識不足が脅迫観念になって休日の「熱心な先生」を生み出し、生徒と顧問の慢性的疲労の環境が作りだされてきたと言っても過言ではありません。

これも、先に記した文部科学省の『運動部活動の在り方に関する調査研究報告』によると右に示したように、80%を超える顧問教員が「やりがいを感じる」と回答しています。

せめて慢性的疲労を生み出さない環境の構築が急がれます。

(運動部の顧問教員)		
運動部活動の指導をどう受け止めているか	中学校	高等学校
やりがいを感じる	88.4%	87.7%
子どもために重要な活動であり大いにやりがいを感じる	41.4	48.0
趣味の延長として考え楽しんでいる	12.0	14.0
要請により引き受けたがある程度やりがいを感じる	35.0	25.8
やりがいを感じない	11.6%	12.3%
仕方なく引き受けたのであまりやりがいを感じない	9.3	9.4
いやいややっている	2.4	2.9

第7章 部活動

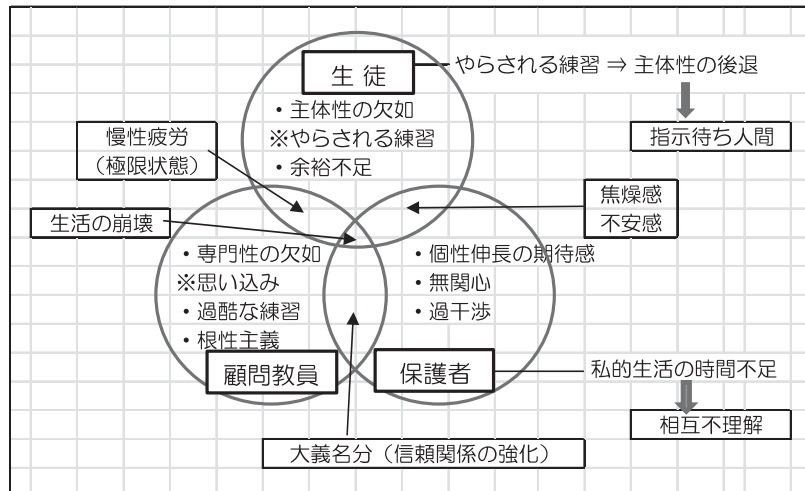
しかし専門性の欠如が解決した様子は伺えません。

また、運動部活動に所属する生徒の保護者は、一般に「無関心」と「過干渉」の二極になりますが、これも先の文部科学省の報告を見ると、90%近くの保護者が活動に満足しているという回答が得られています。

生徒・顧問教員・保護者が抱える問題点を整理してみると、次のようになり、三重に重なる部分に「生活の崩壊」を置きましたが、これが決して言い過ぎではないことも知って欲しいことです。

子どもの運動部活動に満足しているか	(運動部員の保護者)	
	中学校	高等学校
満足している	87.4%	90.3%
多いに満足している	16.4	20.3
ある程度満足している	55.3	56.7
少し満足している	15.6	13.4
満足していない	12.7%	9.7%
あまり満足していない	11.4	8.7
まったく不満である	1.3	1.0

【資料⑦-2】生徒・顧問教員・保護者の三者がかかえる問題点



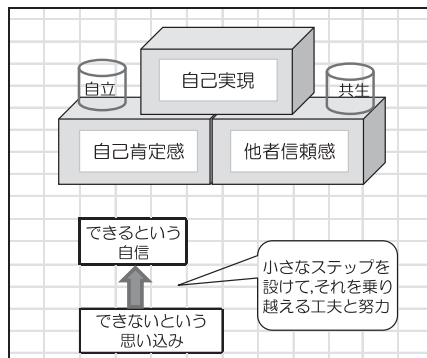
(4) 解決への模索

部活動は生徒の自己実現の手段のひとつと行うものと理解すると、【資料⑦-3】に示したように考えることができます。

自己実現は、自立を目指す「自己肯定感」と、共生を目指す「他者信頼感」に支えられるものですから、生徒が抱えている「できない、という思い込み」を「できる、という自信」に変える取り組みが有効です。

そのためには、小さなステップを設けて、それを乗り越える工夫と努力が必要です。顧

【資料⑦-3】自己実現



第7章 部活動

問教員は、そのステップに挑戦する生徒を励ます存在でなければならないのです。

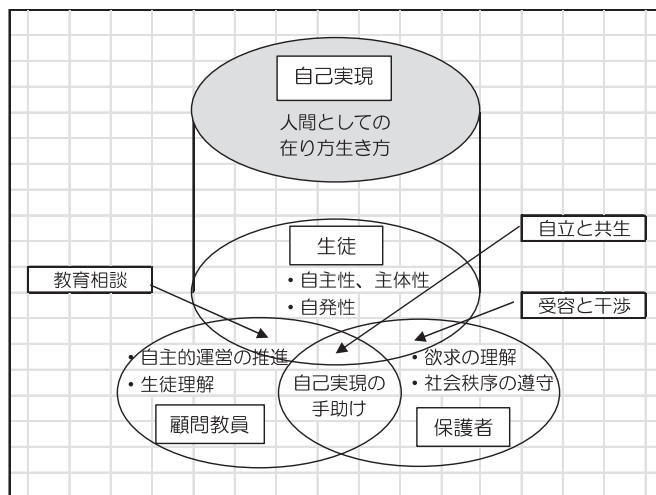
また、部活動において生徒の自己実現をめざすためには、生徒・顧問教員・保護者の三者に、【資料⑦-4】に示した関係が望まれます。

顧問教員は、生徒理解に立って生徒の自主的運営を推進する存在であり、保護者は、生徒の欲求を理解した上で社会秩序の遵守を促す存在であって欲しいと願っています。ともに自己実現を目指す生徒を支える存在であらねばなりません。

生徒は、顧問教員との教育相談を通して、自主性、主体性、自発性を伸長させ、人間としての在り方生き方を探求するような活動が望まれます。

【資料⑦-4】

生徒・顧問教員・
保護者の関係



【演習⑦-A】

文部科学省は、2013（平成25）年3月に、「体罰の禁止及び児童生徒理解に基づく指導の徹底について（通知）」を発表しました。次頁に示したのは、この内容に記された「部活動について」と題したものです。よく読んで、あなたが部活動の顧問に就いた場合、どのような心構えが必要なのか、考えてみましょう。

心構えを「生徒に対するもの」、「同僚に対するもの」、「保護者に対するもの」に分け、自分で整理してものをグループで説明し、質疑により補足して、より適切なものにまとめ発表しましょう。下のフォームを利用して整理し、相互評価を行います。

第7章 部活動

- (1) 部活動は学校教育の一環であり、体罰が禁止されていることは当然である。成績や結果を残すことのみに固執せず、教育活動として逸脱することなく適切に実施されなければならない。
- (2) 他方、運動部活動においては、生徒の技術力・身体的能力、又は精神力の向上を図ることを目的として、肉体的、精神的負荷を伴う指導が行われるが、これらは心身の健全な発達を促すとともに、活動を通じて達成感や、仲間との連帯感を育むものである。ただし、その指導は学校、部活動顧問、生徒、保護者の相互理解の下、年齢、技能の習熟度や健康状態、場所的・時間的環境等を総合的に考えて、適切に実施しなければならない。指導と称し、部活動顧問の独善的な目的を持って、特定の生徒たちに対して、執拗かつ過度に肉体的・精神的負荷を与える指導は教育的指導とは言えない。
- (3) 部活動は学校教育の一環であるため、校長、教頭等の管理職は部活動顧問に全て委ねることなく、その指導を適宜監督し、教育活動としての使命を守ることが求められる。

個人	生徒に対する心構え								
	同僚に対する心構え								
	保護者に対する心構え								
グループ	生徒に対する心構え								
	同僚に対する心構え								
	保護者に対する心構え								
「心構え」相互評価		3段階評価	特に良い＝3点／普通＝2点／いまひとつ＝1点（自分の班は評価しない）						
評価項目	グループ	1班	2班	3班	4班	5班	6班	7班	8班
①	生徒に対する								
②	同僚に対する								
③	保護者に対する								
	合 計 点								

執筆者

澤田敏志 神奈川大学人間科学部特任教授 (兼 編集責任)

中村眞一 神奈川大学人間科学部非常勤講師

齋藤 元 神奈川大学人間科学部非常勤講師

高橋正尚 横浜国立南高等学校附属中学校校長

為すことによって学ぶ

～神奈川大学教職課程「特別活動論」テキスト～

発 行 2016(平成28)年3月20日

発行者 神奈川大学教職課程
「特別活動論」テキスト編集会

印 刷 神奈川大学生生活協同組合

※表紙の写真は、神奈川大学横浜キャンパス「神大橋」から眺めた桜です。
(2015年4月澤田撮影)